

## 宮古の現代史を駆け抜けた先人たち

仲宗根 將二

### はじめに

人はみな五十歩百歩の違いこそあれ、先人の歩みに学び考へ悩み、試行錯誤しつつ歩んでいるのではなからうか。大小八つの島々の寄り集まった宮古圏域の総面積は全県のほぼ十分の一、人は二十分の一でいどである。すべて隆起サンゴ礁の海拔百メートル以下でいどの低平な島々で、表土浅く乾きやすく地表を流れる川はないに等しい。台風の常襲地帯で日照りに弱く大木の育ちにくい土地柄である。そこにも貧しくとも誠実で勇敢・進取の気性に富み、人間性ゆたかな人びとのいとなみ―歴史がある。古宮古以来の歴史の総体であろうか、近代初期来訪した政府高官らは、ひとしく「標悍の気風」と評している。近年、事あるごとに話題にされる「あららがま精神」なるものの底流をなすものであろうか。

古くは有視界航海の困難な地理的位置のせいであろう、現代につながるであろう人びとの渡来・定住は十二、三世紀以降とみなされている。自立した「豊見親（トウユミヤ）の時代」、琉球王国―薩摩藩支配下の「人头税社会」をへて、一八七九（明治十二年）、「琉球処分」―廃藩置県で近代を迎えて、人头税廃止運動に決起し、廃止後諸産業の振興にともなつて、

人材育成にも力を尽くしている。

普通教育が始まったのは廃藩置県三年後の一八八二（明治十五）年であるが、未だ地元（いづみ）に中等教育機関さえない一九〇五年早くも全県に先がけて育英制度を設け、県外高等教育機関への修学助成を始めている。このように早くに近代の洗礼を受けた人びとの先導もあつてか、昭和初期には男女の中等教育機関も設立されている。現在の県立宮古高校の前身である。

市町村合併前の旧平良市時代、きわめて恣意的だが早くから地元はもとより県内外で活躍する、既に故人となつた二十余人を市の「広報ひらら」（月刊）で紹介した。連載前後に物故した方々については地元紙等でも紹介し、のちに両者を合わせて『近代宮古の人と石碑』（いづみ）（私家版・一九九四）の題で改めて公表した。次の諸士である。

立津	春方、砂川	真修、富盛	寛卓
國仲	寛徒、仲松	恵知、宮里	三郎
池間	昌喜、盛島	明長、比嘉	財定
石原雅太郎、仲宗根玄愷、佐久田昌教			
仲間	屋真、平良	彦一、嵩原	重夫
池村	恒章、上里	忠勝、慶世村恒任	
川平	朝建、友利	明令、下地	玄信
稲村	賢敷、大山キク子、國原	賢徳	

下地 敏之、金井喜久子

(以上は「広報ひらら」、生年順)

平良 恵盛、伊志嶺朝茂、稲村 賢敷

克山 滋、大井浩太郎、島尻勝太郎

池城 恵正、下地 馨、池村 恵祐

宮國 定徳、藤村 市政

(以上は「地元紙」等 紹介順)

さらにその後も大方地元にあつて直接間接に教えを乞うてきた先輩・知友のご世界にさいして、「追悼」という形でその足跡を追い、その専門の領域はもとより地域社会とどう関わってきたかを紹介してきた。郷土史研究会の「会報」や地元紙等を通じて、多少なりともその学恩にお応えしたいという思いからである。

こうして故人となつた一八九九(明治三二)年生から、一九四一(昭和十六)年生までの二二一人、「宮古の現代史を駆けぬけた先人たち」の表題で、改めてここに再録することにした。近・現代宮古の生んだ先学諸士の足跡を通して、その活動の領域はもとより、可能な限りその時代背景にもふれることで地域史Ⅱ宮古を浮きぼりにしたつもりである(生年順)。

宮原 昌茂、与那覇寛長、仲元銀太郎

前泊 徳正、平良 好児、羽地 栄

平良 新亮、富永 裕夫、宮国 泰良

垣花 秀武、渡久山春好、砂川 明芳

佐渡山正吉、伊良皆春宏、友利 定雄

松原 清吉、上原 清治、本永 守靖

宮里 光雄、内間 一光、下地 肇

砂川しげひさ

洋画家

宮原昌茂(一八九九〜二〇〇六)

京都在住・宮古出身の洋画家、宮原昌茂画伯が本年八月十三日永眠されました。平良は下里の旧家(益茂氏)のご出身で、一八九九(明治三十二)年二月六日生まれですので、満百七歳、稀に見る長寿のご生涯でした。一九二三(大正十二)年三月、沖縄県師範学校を卒えて数年宮古で教壇につき、研究訓導(美術)として二年間京都に派遣されたのち帰郷、さらに上京、再度京都に移り住んだが、その間教職の傍ら画業に精進され、近代宮古美術界の草分け的存在でした。

一九六四年夏、請われて宮古教職員会事務局につとめたときの職務は機関紙中心の情宣担当でしたので、宮古内すべての教育機関を歴訪するのが日課でした。ある日のこと、北小学校で「創立八十周年記念誌」をみせてもらいました。そこには眼を見張るばかりの面々―卒業生の祝辞や回想記が収録されていました。地元在住の三島良章、砂川恵一、白川英男、

富永寛、与那覇春吉、平良寛、譜久村寛仁、宮国泰誠……（いずれも故人）らにまじって、県外各界で活躍する同窓生も多数寄稿しています。執筆順に抄出しますと次の方々です。

仲宗根玄愷（東京・会社重役）、砂川一（大阪・会社重役）、下地玄信（大阪・日本公認会計士協会副会長）、国原賢徳（東京・弁護士）、宮原昌茂（京都・洋画家）、下地恵常（埼玉・高校長）、砂川恵昭（東京・教育大学）など、文字通り綺羅星の如く、という表現がぴったりと言えそうなお名前が並んでいます。これが宮原先生を知る初の機会でした。

それから十年、再び請われるままに平良市教育委員会に移りましたが、ここでは文化財保護や修史事業、市民総合文化祭等を担当、史資料を求めて教育機関はもとより、市内外あらゆる人・所をたずねて歩く日常でした。ある日のこと、イリりの先輩・奥浜真正さん（故人）から絵を寄贈するので取りに来てほしいとの電話が入ったのです。宮原画伯描く旧「蔵元正面図」です。

宮原画伯が戦後初めて帰省したさい、一九五六（昭和三十一年）年三月、宮古琉米文化会館（その後文化センター、現市立図書館）二階ホールで催された第二回個展の出品作とのことでした。みやこ無尽の東恩納盛良さん（故人）が買い上げ、数年後親交のあった奥浜さんに贈ったのだそうです。画題は「明治初期の旧蔵元政庁図」で、蔵元に関する手書きの解説文までついていたのを記憶しています。古琉球から近代初期

にかけて、琉球王府の宮古統治の、いわば総合庁舎の回想画です。蔵元は一九〇七（明治四十）年四月、焼失しているため、当時としても現物を記憶している人はそう多くはなさそうでした。全景写真も残っていないだけに、往時を偲ぶにふさわしいきわめて貴重な作品といえるでしょう。

さらに有り難いことに奥浜さんはそのときの三十点にのぼるガリ版刷りの展示目録も所持しておられたのです。母、裏町、樹木（其の一）、おもと、海岸、樹木（其の二）、クロトン、市街、カンナ、婦人像、静物、台所、樹木（其の三）、裸婦臥像、道、カンナ、魚、港、てんま舟、裸婦（胸像）、漲水港、与那覇湾、棧橋、琉装の女、入江の舟、旧蔵元（其の一）、旧蔵元（其の二）、観音堂、以上三十点。

このときの個展がきっかけで、下地明増、平野長伴氏らによつて宮古美術同人会が設立されています。ほどなく「二季会」と改称、毎年春・秋の二回展示会を催すとともに、県内でもユニークな美術家集団として活躍しているのは周知のとおりです。

宮原画伯の三回目の帰省は一九七七〜八三年で、そのさいも個展が開かれ、いっそう精緻をきわめた「旧蔵元正面図」「同裏面図」「観音堂並参道図」など三十六点が展示されています。数年にわたる長期滞在のせいか、宮古内各地を歩いてのスケッチはもとより、戦火はじめ様々な理由で失われてしまった景観や文化財の復元について提唱し、精力的に地元紙

に寄稿していました。京都へお帰りになったのちも寄稿はつづき、一九九九年、まさに百歳になってまで、およそ六十余回にのぼるご寄稿です。老いてなお高まるふるさとへの熱い思いが、このような執筆に駆り立てたのでしょうか。

二〇〇二年二月、平良市総合博物館(当時与儀隆館長)が、施設で静養中の画伯の同意と故エイ夫人の妹・石川ひささんご一家の協力をえて、第四十一回企画展と題して「宮原昌茂展」を催したのは未だ記憶に新しいところです。このときは宮古滞在中に制作した石原雅太郎、下地盛寿・安夫妻、高嶺博昭・志津夫妻、盛島明秀、高嶺長二、下地恒喜・満寿江夫妻らの肖像画等もまじえて五十一点が展示されています。

宮古郷土史研究会の設立間もない一九七八年五月定例会では、会員の譜久村寛仁先生宅で、池間昌祥、宮原、浦崎安常三先生を囲み、羽地栄(いずれも故人)の司会で、「昔の平良を語る」座談会を開いたこともありました。戦前の漲水御嶽・蔵元周辺や衣・食・住等各方面にわたって話してもらっています(「会報」一八号、一九七八・六・七)。

本稿では主として画伯の三回にわたる展示会を中心に、そのあらましの紹介に止どめましたが、詳細な経歴や画業等については、さきの平良市総合博物館「宮原昌茂展」目録並びに「発する人・宮原昌茂さん」特集「広報ひらら」四三四号(二〇〇一・七・一)また、新聞寄稿エッセイについては小論「宮原昌茂画伯の百歳の長寿を祝う」(「会報」一一一号、

一九九九・三・一二)をご参照いただければ幸いです。

百余年の生涯にわたって宮古の美術界を励ますとともに、失われた景観や文化財の復元・保全を求めて絶えず提唱しつづけた宮原昌茂画伯のご冥福を心から祈るものです。エイ夫人のもとで安らかにお休み下さい。合掌。(宮古郷土史研究会報「一五七号、二〇〇六・十一・三〇」)

## 教育者

与那覇寛長(一九〇七〜一九九五)

### 1. 宮古教育界の重鎮

戦後宮古の教育を語るにさいして見落としてはならない幾たりかの先人がおられる。県立宮古中学校の最後の校長であり、新制宮古高校の初代校長でもあった稲村賢敷は歴史家として多くの著書・論考をお持ちなので一応おくとして、砂川恵敷、与那覇春吉、与那覇寛長……らがあげられよう。もともと二人の与那覇は生前よく宮古教育界の重鎮は「恵敷先生」だと言っておられたのを思い出す。それだけ二人は恵敷の影響を受けていたのかも知れない。ちなみに恵敷は一八九八(明治三十二年)一月、春吉は一九〇四(明治三十七年)五月、寛長は一九〇七(明治四十一年)一月九日の生まれで、三人の中ではもとも若いが、早くも今年(二〇〇九年)の節目である。そこで寛長先生をおして、戦後初期宮古教育の軌跡を概略たどることにしたい。便宜上初めに教職歴に

ふれるが、出生地は城辺・下里添。次のとおりである。

## 2. 教職歴

- 一九二六（大正十五）・三 沖縄県立第一中学校卒
- 一九二八（昭和三）・三 沖縄県師範学校本科二部卒
- 一九二八〇 三三・三 西城小学校訓導
- 一九三三・四〇三四・三 沖縄県師範学校専攻科卒
- 一九三四・三〇三七・三 平良第一小学校訓導
- 一九三七・四〇三九・三 研究訓導で岡山県へ出向
- 一九三九・三〇四二・三 平良第一小学校訓導
- 一九四二・三〇 鏡原国民学校教頭

### （台湾疎開）

- 一九四六・二〇四七・一 福嶺初等学校校長
- 一九四七・一〇四九・三 宮古民政府文教部教学課長兼視学
- 一九四九・三〇五一・三 西城中学校校長
- 一九五一・三〇五二・六 平良南中学校校長
- 一九五二・六〇六一・四 宮古連合区教育委員会教育長
- 一九六一・五〇七〇・四 平良中学校校長
- 一九七〇・四〇七二・三 西辺中学校校長

### 3. 「六・三・三制」施行

戦前、研究教員として岡山県での二年間の教育実践の成果は、当時の『琉球新報』に「教育断想」と題して五回連載されているが、本題とは直接関係ないので省略する。戦後は疎開先の台湾から帰って、鏡原小教頭、福嶺小校長をへて、宮

古民政府文教部入りしている。そのときの部長が砂川恵敷で、他府県に一年遅れはしたが、全県に先がけて宮古独自に宮古教育基本法等を制定、六・三・三制をスタートさせている。

部長の長男恵弘氏が当時東京大学在学中を幸いに、宮古島測候所への補給船を利用して、戦後の新しい法令集等を入手している。戦前・戦中の、「軍国主義・超国家主義」にもとづく「皇国民の錬成」から、民主主義教育への転換である。きちんと印刷された教科書もなく、教科ごとに編集委員会が組織されて検討した内容は、ガリ版刷り教科書となって各学校に配布された。作業に当たった職員の中には、下地明増、洲鎌玄亮、羽地恵康、伊良皆春宏……氏らもおられたようである（与那覇寛長〈砂川恵敷〉「文教部長時代」）。

これらに先だって、敗戦の翌四六年四月には宮古中学校に農科、開洋科が設置されている。焦土の中からの再出発に当たって、多様な人材育成に配慮したのである。同年六月、中学校を宮古高等学校、女学校を女子高等学校に改め、翌四七年四月には農科を農林部、開洋科を水産部に改称、四八年四月、六・三・三制施行によって今につながる実業高校として独立させた。女子高はその後五四年六月、宮古高校に統合されている。

### 4. 恵敷―寛長―春吉……路線

文教部を出た寛長先生は、城南中学校が砂川中と西城中に分離した四九年三月、西城中学校長、ついで平良南中学校長に就

任した翌五二年六月、全琉球一円の「琉球政府」が創立して宮古連合区教育委員会が設立されたとき、初代教育長に就任している。宮古六市町村に新設された各区教育委員会を統括する機関で、指導主事や社会教育主事、訪問教師らも配置されて、「政府」立高校を除く宮古内すべての幼稚園、小・中・高校を定期的に訪問、指導し、学校経営全般はもとより、人事異動に至るまで取り扱っていた。九年勤続して六一年五月、平良中、七〇年四月、西辺中学校長をへて、本土復帰を目前にした七二年三月、退職している。

その後の連合区教育長は、与那覇春吉、池村一男と各四年宛勤め、四代目砂川玄隆のとき本土復帰を迎え、連合区教育委員会はその任を終え解散している。池村一男も恵敷・春吉らの薫陶を受けて教育者の道を歩んだ一人であり、戦後宮古の教育は、砂川恵敷―与那覇寛長―与那覇春吉―池村一男…の路線によって推進されたと言っても過言ではなからう。

#### 5. 県議二期八年

寛長先生が教育界を去って一月余後、沖縄県は本土復帰を実現した。一九六〇年代の壮大な祖国復帰運動を推進した「復帰協」の中核をなしたのは民間団体では周知のように、沖縄教職員会である。一九五一年五月結成された宮古地区教職員会の初代会長は与那覇春吉（九年）、二代目は与那覇寛長（十一年）である。お二人とも教職現場におられるままの会長職であり、校長・教頭を含む会員の信望の厚さを示すものであ

らう。

一九七二年五月、新生沖縄県が誕生したとき、初代県知事に選出されたのは、沖縄教職員会長から一九六八年、初の公選行政主席を勤めた屋良朝苗である。そのとき寛長先生は宮古選挙区（定数三）から県議に当選した。二期八年無投票当選である。その後の三十余年、県議選の激戦振りを想起すればまさしく幸運児と言えるのではなからうか。一九八七年二月、平良市名誉市民、一九九五年六月一三日死去、八十九歳。七月三日平良市民葬。（「宮古郷土史研究会報」一六三号、二〇〇七・十一・一五）

#### 教育者

仲元銀太郎（二九一〇～一九九八）

本年七月二十五日は故仲元銀太郎先生の生誕百年の節目の日であった。銀太郎先生といえは、「ゼロからの出発」といわれた敗戦直後の激動を生き抜いた人びとは、「新宮古建設の歌」を思いおこすのではなからうか。それほど戦後宮古の出發は、銀太郎先生の作詞したこの歌と密接に関わっているように思う。

#### 1. 「新宮古建設の歌」

さきの太平洋戦争で明治以来の「大日本帝国」は、アメリカ・イギリスを中心とする連合国軍の無差別爆撃にさらされ、一夜にして十万人を殺傷した東京大空襲、地上戦「沖縄戦」、

……広島・長崎への原爆投下等をへて、無条件降伏した。敗戦で価値体系は百八十度の転回である。宮古も連日の爆撃で平良のまちはもとより、集落の大方は焦土と化した。人びとは衣・食・住はじめ、すべてに事欠き、飢えとマラリアが猛威を振るうなかとはいえ、焼跡でいつまでも呆然自失しているわけにはいかなかったであろう。

沖縄県は崩壊し、国との連係も失われたなか、米軍の占領行政が始まる以前に、宮古支庁はじめ町村役場は一定の活動を始め、情報に飢えた人びとのために新聞も再開している。宮古支庁は宮古民政府に改められ、米軍の許容範囲内とはいえ「自立」を模索し始める。小さな新聞や小さな文芸紙(誌)ではあったが、それに拠る若ものたちは「強力なジャーナリズムの形成」を求め、「文化立島」を標榜した。

宮古民政府は戦後の本格的な出発に向けて「新宮古建設の歌」を公募し、戦火・敗戦で打ちひしがれた人びとの心を鼓舞するとともに、文化連盟並びに文化史編さん委員会を発足させ、伊波普猷・富盛寛卓・慶世村恒任ら歴史研究の先駆者の追悼会を催すなど、先人の歴史に学ぶことから始めている。「新宮古建設の歌」はこのように宮古の上下あげての鮮やかな気運のなかで生まれ、当時の、とりわけ若ものらの新しい宮古建設への気運を高めていった。作曲は、銀太郎先生に一年若い故豊見山恵永である。

## 2. 真摯な教育活動

銀太郎先生に初めてお会いしたのはいつであったか定かではない。しかし地元新聞社にいたころにお名前を知ってから早や五十年をかぞえる。一九五九年四月、宮古水産高校の職員はガリ版刷りの校内同人誌『つどい』を創刊された。故砂川明芳、松原清吉、下地勉、下地康嗣、長浜郁子、仲元銀太郎先生ら十五人の名が五十音順に明記されている。巻頭に「はじめに」と題して、「時代なのだ。」生徒のいろいろな問題をこのことばでかたづけたくない。／吾々は「どうしてか」を／試み／たいのだ。(原)——と記し、「目次」の次には、「この集録は、お互いの話し合いの場をつくるために／お互いの知りたいもの、しらべたいものを提供しあうために／そして／いこいの場を作ることをも 目的にして／生みだすものである」と記し、十五人の名はこのあとにつづいている。敗戦後の米軍全面占領下、教職員の、次代を担う高校生をどう育成していくか真摯な姿勢をうかがわせる。壮大な祖国復帰運動が展開される一九六〇年代への胎動ともいえよう。銀太郎先生は、創刊号では「教育職員免許法の手引」、二号では「旅の教師」(一)、三号は砂川明芳単独の特集号(「多良間への報告」)のため、四号で「旅の教師」(二)とつづげ、さきの大戦中、研究訓導として二カ年、伊勢神宮のある三重県に派遣されたときの生活を「創作」というかたちでまとめていく。

## 3. 「戦争体験」の聞き取り

一九六四（昭和三十九）年七月、請われて宮古教職員会に移り、機関紙の編集を中心に情宣活動を担当してからはお会いする機会はふえてきた。砂川小の教頭から大神小中、西城中学校長をへて祖国復帰の前年、一九七一年三月退職されている。そのころからは戦中の体験をいろいろお聞かせいただいた。三重県ではすべての教科で「皇国の道」を研究し発表した、天皇の祖先神を祀る伊勢神宮にお参りする皇后を迎える人たちが「勿体ない有難い」といつて皆泣いている」のに、「涙さえでない」のは「沖繩にうまれたから、国民的意識が低いんだ、恥ずかしい」と思い、劣等感にとらわれた」、新里（現上野）小に帰ってからは、防衛隊に召集され、数え十六く八歳の少年たちの隊長をさせられ、毎日十キロ爆弾を戦車に投げて死ぬ訓練をさせられた、敵の機銃掃射で四散した兵士の肉片を拾い集めた、高等科一年生の教え子が爆弾の破片をうけ麻酔なしで手術され、悲鳴をあげながら死んでいった、などを聞き取りした。戦後、銀太郎先生の平和運動、平和憲法のもとへの「祖国復帰」運動の原点をなす、これらの戦中体験は、『沖繩県史』第十卷（一九七四年）に収録させてもらった。

#### 4. 好児さんとの友情

今も銀太郎先生を敬愛する多くの教職員を承知しているが、先生ご自身が親しくしておられたなかに、故平良好児がいる。好児は周知のように宮古における「文学の種まく人」を自任

し、八十余年の生涯を駆け抜けた稀有の人である。総合文芸誌『郷土文学』（季刊）を九〇号まで休みなしに発行し、この間八冊の単独歌集も上梓している。その『郷土文学』に銀太郎先生はほとんど毎号寄稿しておられる。その友情には只々敬服するばかりである。

内容は、小学校時代の師、慶世村恒任、与那覇春吉、金城栄治、下地恵常らへの敬慕の念とともに、故郷パナキシャ（＝豊原）から旧上野村にまつわる話題が大方占められている。

「戦後の原点」では、「敗戦の廃墟に立って、私たちが実現を願ったのは、今のような快樂と消費の欲望のウズ巻く日本ではなかった」「貧しき中にも幸福はある。平和で道徳的に清潔な国、真実の尊重される国」だった（七三号、一九九一・一）と記している。

#### 5. 「生誕百年」と「十三回忌」

一九九四年三月、新里小学校時代の教え子らによって、うへのドイツ文化村に「新宮古建設の歌」碑が建立された。一九九九年には、ご子息らによって遺稿集「流れ 流され」が上梓されたという。本年十二月二十六日は銀太郎先生逝いて十三回忌である。改めて、ご冥福をお祈りするものである。（「宮古郷土史研究会報」一八一号、二〇一五・十一・五）

#### 「池間民族」

前泊徳正（二九一〇～一九九八）



代表的な「池間民族」のお一人であった前泊徳正さんが、本年十月二十日永眠された。一九一〇（明治四十三）年三月生れなので、教え八十九歳であるが、小学校入学は九十歳組と一緒にあつたらう。

池間島の歴史や民俗、祭祀、歌謡等の調査、研究で、徳正さんのお世話にならなかった人はいないといつても過言ではなからう。古くは一九六一（昭和三十六）年四月〜九月、半年にわたって池間島に住み、調査にあつた院生時代の故野口武徳成城大教授はじめ、多くの研究者が徳正さんの世話になつている。野口教授はその後もさらに十年余池間通いをつづけ、池間島ひいては宮古⇨沖繩に関する多くの論文を発表している。傍ら研究者向けでない「池間島の人々に捧げる書」として名著『沖繩池間島民俗誌』（一九七二年、未来社）を刊行された。野口教授の池間島への思いの深さをうかがうことができよう。同時に徳正さんをはじめ池間の人びとが研究者に對していかに身内同様に接していたかをも知ることできる。

徳正さんとの出会いは野口教授の滞在時期と重なる一九六〇年代初頭であつたから、かれこれ三十数年はなるう。平良市教育委員会で文化財保護や市史編さん事業が本格化した一九七四年からは、「ご教示をいただく日々は一層ふえていった。昭和五十年年度版『平良市の文化財』に「池間島の年中行事（神事）」を執筆してもらつたが、池間の「ユークイ」や「ミヤークツツ」にかかわる知識は、すべて徳正さんに負うものであ

る。池間の民俗方位の呼称が、宮古の他の地域と大きく異なつてゐることを教えてくれたのも徳正さんである。南⇨アイ、東⇨ンス、西⇨ハイバラ、北⇨イー、というぐあいである。平良へ出てこられるごとに、池間の新鮮な海の幸を持参された。公私ともに忘れ難い思い出である。

徳正さんには、『池間島のミヤークツツ』（一九八一年）、『池間島の民謡』（一九八二年）、『第二重宝丸の遭難記』（一九九三年）等の著書がある。『池間島のミヤークツツ』は同年、沖縄県選択無形民俗文化財記録作成のために、徳正さんを代表に設立された池間島民謡保存会に、本永清、砂川玄正、幸地哲氏らが県の委嘱を受けて調査、執筆したものである。八十二頁中、六十四頁は徳正さん、残る十六頁が四人の分担執筆であり、徳正さん一人の報告書といつても、あながち不当ではなからう。また、『池間島の民謡』のあとがきには、「二十年程前」に着手し、「書き終えてから日の目を見るまでに五年の歳月が過ぎた」と記している。さらに池間の歴史や文化に興味を持たせてくれたのは野口教授であるとも記している。

その野口教授が、さきの『民俗誌』のなかで、徳正さんを「民間社会学者・前泊徳正」の項を設けて、「非常な勉強家であり、読書家である。沖繩の歴史にもくわしいし、池間の習俗にも関心をもっている」と記している。この時期の徳正さんは池間のあらゆる事柄に関心をもち、調査はしても自分の本にして発表しようなどとは考えていなかった。さきの『池

間島の民謡』のあとがきには「私は自ら調査、録音したものがどんなかたちにしる日の目を見るのは喜びであった。訪ねて来られる人々に惜しみなく資料を提供した」とも記している。まさにお人柄のなせるわざといえよう。

誰よりも「池間民族」であることを誇りにした徳正さんの話題は多彩であった。オハルズ御嶽の神様から七代めが、「ユークイ」をはじめた仲間豊見親で、それからさらに七代めが池間出身で初めて県立中学に入った故仲間貞夫である、ドイツ商船ロベルトソン号を救助したのも池間の漁師、「久松五勇士」の役目は先に池間に声がかかっていた、など。「池間民族」が、近代国民統一国家を形成する民族の概念ではなく、池間島出自をもつ人びとの集団をさしていることはことわるまでもないだろう。

さきには野口武徳教授に高く評価され、近年には横浜国大の笠原政治教授に「池間島現地の研究者として学界にも広く知られている前泊徳正翁」（池間民族）考」と、紹介された徳正さんはもういない。（『宮古新報』一九九八・十二・十八）

#### 新聞・文学の「種まく人」

平良好児（定英）（一九一一～一九九六）

一日昼過ぎ、かつての職場の同僚から電話で、平良好児さんの死を知らされた。文字通り晴天のへきれきにもにた突然の訃報（ふほう）である。

日ごろ好児さんの身近なひとりであることを自認している身には、まったく信じ難い知らせであった。何しろつい二日前の土曜日の朝、そろそろ『郷土文学』の原稿依頼のはがきがくるころだなと思っただばかりなのだ。

昨年末ギリギリに九十号刊行を祝う小稿を直接、自宅の上框（あがりがまち）で手渡し、年明けて一月十一日の朝は、逆に好児さんが寓居に立ち寄られて、八つ目の歌集『花炎』を届けてくれたことまで想いおこしていたのだから。

現在地に移り住んで二十余年、好児さんが初めて訪ねてこられたのだ。

「どうぞ、お茶でも……」とお誘いしたのに、「いやちよっと用事で外出したので、ついでに届けにきた」と、にこやかに語られてそのまま帰られた。そのときいつものようにお元気そうに見えたばかりではない。その後とも入院はもとより手術されたことさえ知らずにいたのだ。何とも無念の思いがつのるばかりである。

好児さんに初めてお会いしたのは一九五七年九月、地元紙の編集局長をしておられて、入社の面接を受けた時である。それから二年、しがらみと誘惑の多い狭い地域社会での新聞人としての処し方について、身をもって教えてもらった。おかげで退社にさいしても何のためらいもなく行を共にし、好児さんが初めて自ら経営兼編集局長となる新聞でも四年半お世話になった。そのころの好児さんの社是ともいうべき口癖

は、ダルマに託した「七転八起」「不退転」であり、「天は二物を与えず」であった。文才と商才が両立しないことを嘆きつつも、本来あるべき新聞の姿を求めてくじけない決意を示していたのであろう。

実兄らの影響もあつて早くから文学少年であつた好兒さんは、二十歳そこらには県紙文芸欄の常連として知られていた。卒業を目前にして心ならずも師範学校を退学させられたが、文学への志は捨てず地元紙で活躍する。

二度にわたる兵役でも新聞人としての思いは消えず、復員後の一九四五年十二月、戦後初の一般紙『みやこ新報』の創刊に参画、翌年三月には旬刊の『文化創造』も創刊している。その後とも那覇と平良で新聞人として生きつづけたが、一九七三年夏、十三年余自ら生み育てた『南沖縄新聞』を停刊し、同年十月、季刊誌『郷土文学』を創刊した。以来一貫して文学の「種まく人」たることを堅持してきた。

三カ月ごとにくり返される企画、原稿依頼、督促、編集印刷交渉、校正、発送……これら一連の作業をすべてひとりで行なう。資金の工面も大変なことであつたろう。とかく「三号雑誌」と評されがちな同人誌等の中で、毎号百人近い書き手を擁し、誌齢九十号は戦前戦後を通して県内では例がない。しかもその間、八冊の自選歌集まで刊行している。

万年文学青年であつた好兒さんのお人柄への大方の共感とともに、やはり幸夫人はじめご家族の支えあつたればこそと

いうことができよう。

生涯を新聞人として、文学の「種まく人」として生きぬいた好兒さん、安らかにお休みください。合掌。（『琉球新報』一九九六・四・三）

#### 商業・地域史研究

羽地 栄（一九一三～二〇〇五）

羽地栄さんが五月二日未明、亡くなられた。今年米寿の八十八歳である。

羽地さんは一九七五年四月、宮古郷土史研究会設立以来の会員であり、翌年初めて役員を選任したが、当初の二か年間は故宮国定徳会長のもと、故座喜味盛紀さんとともに監事をつとめられた。その後はほぼ十年間、会長が現顧問の平良新亮さんに代わられたのちも運営委員をつとめられた。いわば我が研究会設立の生みの親の一人ともいえる。ユーモラスな一面もあつて、長年金融界におられた座喜味さんが護佐丸を元祖とする首里毛姓の家柄であることに敬意を表していたのである。ことあるごとに「座喜味親方（ざきみウエーカタ）」とよんでおられた。羽地さんは生まれも育ちも平良市は西部のイリ里である。沖縄本島の方言は聞くばかりでなく、話す方も宮古ばなれておられた。時には宮古方言のつもりで首里方言を使っているのではないかと、錯覚をおこさせるほどに馴染んでおられた。

お二人とも酒は強いほうではなかったように思うけれども、若い会員が宮古の酒座にふさわしく議論沸騰しないうちに、早くも酔顔朦朧としていたが、それでいて、酒をよくたしまれる宮国先生にあおられてか、いそいそと二次会の話題をしておられたものである。興至らば料亭華やかなりしころのイリ里の殷賑（いんしん）振りもほどほどに聞かされたように思う。

定例研究会の発表ばかりか、不自由な足をかばいつつも史跡めぐりに同行して解説しておられた羽地さんが、ある時期から欠席がちになったのは体調がすぐれなかったばかりではあるまい。県立図書館の郷土史講座から、郷土史研究会設立まで、よき会友であり、ウマのよく合った宮国定徳会長はじめ、座喜味盛紀さんらが早々と彼岸へ旅立たれたさびしさもあつたのではないだろうか。年輩の方も若年も世代を越えてわかまりのないよき研究会活動でありたい、と改めて痛感している。周知のように羽地さんの口ぐせは「宮古の文化の発祥地はイリ里」だということであつた。四面海に囲まれた宮古には人も物もすべて海の外から入ってくる。古琉球以来、港（漲水港↓平良港）に面したイリ里は、その受け入れ口だ、という持論にもとづくものである。それゆえであろう。イリ里には物知り、博識の古老が多い。話し好きの羽地さんは聞くのも好きである。暇さえあれば近所の古老をたずね歩き、昔の人の暮らし、方言、歌謡などを丹念にノートにとつてお

られた。家業の食堂「来々軒」に食事に通つた多くの学生、研究者は、羽地さんの紹介で古老をたずね、あるいは羽地さんの話を聞くことで研究を深めることができた。そのうち羽地さんに語つてくれた高齢者はこの世を去り、いつか羽地さんご自身が「語り部」になつておられた。羽地さんこそまぎれもなく「イリ里の生き字引」であり、「イリ里の顔」になつておられたのである。

今年米寿を迎えるお父上のために、長女の米子さんと夫君の満明さんご夫妻は、羽地さんの足跡をいくらかでもかたちあるものにしたたい、と取りあえずイリ里にかかわる論考一本にしぼつてまとめた、「イリ里の民俗」（仮題）の出版準備をすすめていた矢先の訃報である。何と不運なことよ、とご夫妻の思いの届かなかつたことを我がことのように口惜しがつていたところ、もれ伝え聞くところによれば、容態の急変をおそれたご夫妻は四月二十五日段階で印刷所の協力を得て、ゲラ刷りの論考を製本してお見せしていたという。「元気になったら、皆さんにお配りして歩きたい」と喜んでおられたとか。天佑というのであろうか。今さらのように父子の情深さに思いを新たにしている。

いまひとつ。平良市文化協会（立津精一会長）のご推挙で昨年十二月、沖縄県文化協会賞を受賞されたことも、遅きに失したとはいえ最後のよき餞になつたのかもしれない。共和ホテルでの受賞祝賀会には米子さんご夫妻にともなわれ、車

椅子で出席されたが、多くの参加者の祝福に静かに微笑み返していた姿が、いまでも鮮やかによみ返ってくる。

三日のご自宅での告別式には、郷土史研究会からも平良新亮、佐渡山正吉、岡本恵昭、砂川幸夫、下地和宏、下地利幸氏ら多くの会員が参列、羽地さんに別れを告げた。羽地さん、宮国先生や座喜味さんのもとで安らかにおやすみください。合掌。(宮古郷土史研究会報)一一八号、二〇〇〇・五・一(三)

#### 商業・地域史研究

平良新亮(一九一九〜二〇〇六)

一九七五年四月、郷土史研究会の設立に参画、初代会長・故宮国定徳先生の後を継いで二代め会長を満十年つとめられた平良新亮さんが、一月二十三日亡くなられた。高齢ゆえに壮健ではないまでもお元気とばかり思っている身には寝耳に水の急逝である。享年八十八歳。

いつのころからであろうか、同じ東仲宗根に居住しながら、毎年定期便のようにいただく年賀状が今年に限って入っていない。ふと、十余年来体調のすぐれぬ奥様の面影が脳裡をかすめた。病状進み介護に追われているのであろうか、と。一度お訪ねしなければと思っていたわづか二旬後の訃報である。お通夜で昨秋来体調をくずしておられたことを知り、後悔の日々をかこっている。

新亮さんの名を知ってから早や五十年近い。一九五〇年代の終わりごろであつたらうか。沖教組宮古支部の前身である宮古教職員会の創作募集で一等に入賞したのが新亮さんの名を知る最初である。同会機関紙の『宮古教育時報』に発表されたとき、創作に関心を寄せる若い教師たちから「平良新亮」とはペンネームであろうか、と問われた記憶は今も鮮明にある。それ以後、時折り地元紙誌上でその名をみるようになった。一九六〇年代の初めごろには故宮国泰良主宰の『週刊宮古』に「私の求道記」を連載、敬虔なクリスチャンであることも知った。

一九六四年七月、請われて教職員会事務局に入り、機関紙を中心に情宣面を担当することになった。周知のように、この時期は米軍の全面占領下、沖縄県祖国復帰協議会(復帰協)を中心に、壮大な祖国復帰運動の高揚期である。その一環として、県民の自治権拡大、行政主席公選要求、教公二法阻止、B五二撤去、原潜「寄港」阻止、減税要求など、生活と権利、平和を守る様ざまな運動が取り組まれていた。それゆえ機関紙は固過ぎる、読みづらいつとの不評に依えて情宣部は各種企画をたて、会員読者の参画を容易にする紙面刷新に当たっていた。

一九六六年六月、折りしも狩俣小学校創立八十周年の時期である。新亮さんは「M先生のことども」狩俣小学校創立八十周年によせて」と題して、十回にわたって寄稿された。

師範学校を出たばかりの「M先生」は高等科一年生であった新亮さんの担任でもなく、週に二、三回、歴史を担当するだけであった。しかし「わずかな接触の中にも、生徒というものは先生の心の内を敏感にかぎとるもののように、M先生は生徒たちの間でも人気があった」。車のない時代の卒業間近な日曜日のこと、新亮さんは父の用事で平良へ出ることになつた。たまたまM先生も所用で平良へ出ることになり、師弟は連れだつて十二キロの道のりを平良へ向かつた。勉強したくても、眼も悪いし、学資もないから、進学もできない、なぜ貧乏なのか……。M先生との往還の話題について、新亮さんは長じて「剰余価値説や弁証法的な社会観からきたものである」ことを知るようになるが、この時期はたんに激励とくけとめ、二年後勇躍台湾へ渡る。

「M先生のことども」を連載十回で閉じるに当たつて、新亮さんは「ある主義や思想のために書いたものではありません。独裁より民主主義が、強制より自由がいいに決まっています。ただ弱い者が強い者（国）のギセイにならない社会がほしいと思います」と付記している。新亮さんのお人柄を偲ぼすものであり、この姿勢は生涯一貫していたといえよう。

台湾に渡つた当座はしばらく洋品店等につとめたのち台北電信局臨時通信士養成所をへて、台北電信局に通信士として勤務、ついで嘉義の郵便局電信課に移つたあと、二十一歳で高雄の陸軍通信隊に二年半徴用されている。さらに半年後の

一九四四年七月、台南の陸軍部隊に衛生兵として召集され、ここで敗戦を迎えている。翌四六年四月帰郷、狩俣部落会役員をしているときに購買店の発足で初代専務、退職後、西里通りに現在の「丸平せともの店」を開設したようである。傍ら生来の読書好きは出身地狩俣をはじめ宮古の歴史に関心をもち、『宮古史伝』や『宮古島庶民史』等を読み、図書館の郷土史講座に熱心に通うようになる。

一九七四年、平良市文化財調査委員（のちの文化財保護審議委員）を委嘱され、翌七五年副委員長、八九〇九一年会長をつとめている。七八年からは平良市史編さん委員も委嘱されている。同じころ県立図書館宮古分館の郷土史講座を受講し、七五年、受講者を中心に宮古郷土史研究会の設立に参画、運営委員に選任される。八二年副会長、八六〇九五年会長として研究会の充実・発展に力を尽くしておられる。

研究会設立以来一九九九年まで、ほとんど毎年定例研究会で研究・調査の成果を発表、「会報」はもとより会誌『宮古研究』にも毎号のように論文を執筆している。文化財保護審議委員としても積極的に調査活動をつづけ、その成果は、七五年、七六、七七、七八、八〇、八一、八二、八五年度版「平良市の文化財」に反映されている。

こうした研究・調査活動が評価されて、一九八七年には平良市社会教育功労賞、九三年同文化功労賞、九六年・沖縄地区史跡整備市町村協議会表彰状、九九年・沖縄県文化功労賞

等、数々の受賞に輝いている。それでいて研究会については「学者でもない、ずぶのしろうとの私のような者でも楽しく学べたということ、これはほんとに私にとって幸いなことであり、ありがたいことであつた」（『会報』一〇〇号）というほどのお人柄である。

二十四日下里在・日本キリスト教団宮古島伝導所での告別式には多くの会葬者が参列したが、研究会員も佐渡山正吉、砂川幸夫、下地和宏ら多数参列、献花した。新亮さんが十余年介護につとめ、もつとも心残りであつたらう、六十余年連れそわれた夫人マツさんは二月二十日、まるで後を追うかの如く静かに永眠された。享年八十四歳。お二人のご冥福を心から祈るものである。合掌。（『宮古郷土史研究会報』一五三号、二〇〇六・三・九）

#### 〈付記〉『平良新亮の足跡・亡羊の記』

一九七五年の宮古郷土史研究会の設立に参画し、八六〇九年は五期十年間会長も勤められた故平良新亮さんの一周忌を記念して、本年一月、ご遺族が『平良新亮の足跡・亡羊の記』を出版された。A四判・二五一頁からなる部厚な「遺稿集」である。大きく「自分史」「私の求道記」「看病日記」の三部構成になっている。当然のこととはいえ全巻をとおして、敬虔なクリスチャンとして誠実に生きた新亮さんのお人柄がそのままにじみでた、心あたたまる内容である。

巻頭の「自分史」は、少年時代、台湾時代、自立への道、わが魂の遍歴、の四章で止まっているが、「母の長期療養中の看病疲れからか、それとも運命なのか、執筆途中で倒れ」ための中断のようである（『発刊にあたって』長男平良博彦）。しかし各章ともにお人柄そのままの節が設けられていて、どのような内容か明示している。第一章「少年時代」は、体小さいということ、食べるということ、子どもが死ぬということ、働くということ、ナツプイという祭祀のこと、ウヤーン（神女）のこと、なぜ農民は貧乏かということ（小禄玄明先生との出会い）、旅立ち計画の失敗（一）、旅立ち計画の失敗（二）、以上九節構成で、狩俣での生い立ちから、尋常高等小学校を卒えて台湾へ渡るまでの幼少期の様々な体験が、家族や狩俣の人びととの暮らしの中で浮き彫りにされている。とくに高等科生のころの小禄玄明先生との出会いは、その後の新亮さんの生き方―世界観の形成に大きく影響していることをうかがわせる。

第二章「台湾時代」は、二度の失敗のち三度めの計画でようやく台湾渡航に成功したが、当初は適職をみつけることができず「ルンペン生活九十日」をへて、ようやく通信士養成所に入ることができた。しかし「通信士」となり前途に希望が見えてきたと思う間もなく、軍属として二年半軍隊（通信隊）に徴用され、除隊半年後さらに一年間正規の軍隊（衛生兵）に召集されて、米軍の爆撃で二か月の重傷と九死に一

生を得ている。第三章は「自立への道」、日本の敗戦で、永住するはずだった台湾に別れを告げて、翌四六年四月、マツ夫人を伴って帰郷した。今も地域に根ざして運営されている狩俣自治会の購買店の設立に参画して初代専務理事となり、三年後、平良の西里通りで丸平商店―丸平せともの店への独立・自営の歩みを記している。第四章「わが魂の遍歴」は、前出の理由によるのであろうか、「キリスト教との出会い」だけで、自分史は中断している。幸いその後につづく「私の求道記」どうかが出ることが出来る。求道記は四十年以前の、一九六四年三月十九日―十一月二十九日まで『週刊宮古』に二十回連載した同名の手記である。その中から、日々の生活の中で、パンのみでは生きない人間、信じられない話、奇跡は信じられるか、愛について、救いということ、神の愛、聖書の愛、罪と罰と恵みと、ことばの魔術性、非絶対化ということ等が収録されている。敬虔なクリスチャンとして、日々の暮らしの中で自らの生き方について真摯に自問自答する、赤裸々な新亮さんの姿をかいま見せてくれる。

体調をくずされたマツ夫人は十余年、闘病生活をつづけておられたが、介護は専ら新亮さんが担当しておられたようだ。その間、誠実で責任感強く筆まめな方ゆえ、丹念に日誌もつけておられたようで、本書に収録された「看病日記」は闘病初期のころであろうか、一九九五年一月三十一日（旧元日）―十月八日までである。マツ夫人の病状はもとより、行きつ

けの開業医との関わり、琉大付属病院の入院・手術の経過、見舞客、家族のこと、炊事、食事、時折には店番から郷土史研究会のことまで記録されている。ここでは研究会関連をいくつか紹介しておきたい。「郷土史研の例会は戦後五十年について語り合ったが出席者わずかに七名でさびしかった。羽地さん大いにしゃべる」（二・十六）、「宮古郷土史研究会から会報（九十一号）が届く。それを読むことで一日がつぶれた。この程度しか勉強できないありさま」（六・十二）、「図書館で砂川幸夫さんに会う。『宮古の戦争遺跡』という小冊子を作るという話。私が六百字余でのあいさつを記すようにと言われた」（七・六）、「郷土史研究会 七月定例会『糟糠の妻』く女性史の一環として、仲宗根将二氏はこのテーマを取り上げたとのことだが、男女間の問題なので、文学としては興味深いテーマだが、女性史という観点からとなると問題が複雑であるように思われる（以下略）」（七・二十）、「砂川幸夫さんあてにハガキを出す」（八・二十）、「宮古郷土史研究会 午後七月例会 岡本氏」（九・二十一）……など。平和や一坪反戦地主について記したのも散見するが、「剣を取る者は剣で亡びる。相手が攻めて来ない状況をつくり出すために努力すること、非武装に徹し、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、わが国の安全を保つ道を選ぶこと……」（八・二十七）などがある。

表題の「亡羊」とは、「逃げた羊をさがし求めるために、歩



き出したが道が幾つにも分かれていて、どちらへ行けばいいのかわからないありさま」(本書より)の意で、新亮さんご自身が明記したのだという。新亮さんの「自分史」は未完のままということなのであろうか。本書公刊に尽力されたご遺族はじめ、狩俣自治会やキリスト教団等に心から敬意を表するものである。この後は、『平良市史』や『文化財要覧』『宮古研究』等に発表された数々の論考をどのようにまとめていくか、研究会に残された課題であろうか。改めて新亮さんご夫妻のご冥福を心から祈るものである。合掌。(宮古郷土史研究会報)一六〇号、二〇〇七・五・一〇)

#### 新聞

富永裕夫(一九二二〜二〇〇七)

三月十八日付、県紙の訃報欄で、富永裕夫氏の訃報を知った。享年八十七歳。二十歳を過ぎたばかりで地元紙に一時勤めていたところ、何かとご指導いただいた先輩である。一瞬走馬燈のように往時を回想しつつ、宮古はまたしても一人敗戦直後の「ゼロからの出発」と言われた頃を知るあたり人物を失ったと痛感していた。

先輩は宮古高校の前身・県立宮古中学校(五年制)七期卒である。東京帝大出身で「無季句の旗手」と囑望され、英語と公民等を担当された鹿児島県出身の篠原鳳作先生の教え子は一七期であり、最年少の教え子の一人である。同じころ

宮古中学には福島県出身の慶徳健先生もおられて、剣道も教えておられた。先輩は一九三九(昭和一四)年三月、卒業後はしばらく家業の新聞社(宮古時事新報)を手伝ったのち、一念発起して当時日本の植民地であった旧「満州」(現中国東北地方)に渡り、同国官吏になった。剣道の好きな上司に「沖縄県出身のようだが、宮古中学を知っているか」と問われて、「その卒業生です、と胸を張ったものだ」と、聞かされたことがある。

当時の宮古中学は一学年一学級の小規模校であったが、慶徳健先生率いる剣道部は二度も県下中等学校剣道大会を制し、全国大会に出場している。「沖縄県に剣道の宮古中学あり」のエピソードは、旧「満州」時代の話とともによく聞かされたものである。

もともと「満州」では楽しい話ばかりがあったわけではない。アジア・太平洋戦争の激化にともなうて関東軍に現地召集された先輩は、急転直下、ソ連軍の捕虜となり、シベリア送りに決まる。国境近くの「黒河」で労役に従事しつつ最後の身体検査があった。若い時の病で肋骨二本を失い肉の一部がめり込んでいることが幸いして、シベリア送りは免れたが、残留組は中国軍に引きつがれてしまう。そこで二度の脱走に失敗、三度め二人の戦友とともにようやく成功する。それからおよそ三カ月、零下三〇度という極寒の「満州」の曠野三〇〇〇里の逃避行をつづけ、大連からようやく博多に復員で

きた。―これは『週刊宮古』二八号（一九六二・一・二八）に掲載された「脱走！逃亡！三千里！」と題する先輩の「終戦記録」の要旨である。

帰郷後、米軍占領下の宮古公論社に入社、戦後の新聞記者生活を始めている。「入社」の弁は全文次のとおりである。

「私が新聞人として公に出たのは今度が始めてであるが、実際に関係したことは遠く中学時代に始まっている。今まで事情があつて表向きに出なかつたが、今回思い切つて公論社に入社した。入社した以上思いきつたことを純客観的に書いてみたい。新聞人の使命なんて今頃ゴタゴタ書く必要はないと思う。要は良心的新聞人たらんことを望むものである。富永裕夫」（『宮古公論』一九四九・一・一三）。

『宮古公論』は一九四六年五月十五日、宮古民主党（委員長・下地敏之弁護士）の機関紙として創刊。五〇年六月、社長富永岩雄、主筆山内朝保の陣容で一般紙『宮古時事新報』に生まれ変わった。十八年へた六八年八月、父・岩雄氏の後を継いでいた富永裕夫氏から座喜味弘二氏が引きつぎ、『宮古新報』を創刊して現在に至っている。しがらみ多い狭い地域社会で「良識派」の新聞人として活躍した先輩はもういない。心から「冥福を祈るものである。（『宮古毎日新聞』二〇〇七・

四・十一）

教育者・政治家

宮国泰良（一九二〇～一九八七）

本年二〇一二年は、沖縄県が本土復帰（＝施政権返還）して四〇年の節目の年である。復帰運動の中核を担った主要な団体の一つは沖縄教職員会であつたが、その宮古地区の唯一の専従事務局長として、「復帰協」初代宮古支部長の重責をも担つた宮国泰良先生没二五年の節目である。

#### 1. 唯一の専従

沖縄県は、太平洋戦争最後の激戦、一般県民を巻き込んだ「沖縄戦」に引きつづき米軍全面占領下におかれた。初期の復帰運動は、軍事的植民地といわれ、つねにいのちと暮らしの危険にさらされるなか、一九五〇年九月、「対日講和七原則」が公表されたところから始まっている。一九六〇年四月二十八日、沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）が結成されて以降、「日本国憲法」の下へ、のスローガンを掲げて、その時々の課題を反映させながら、壮大な祖国復帰運動が展開された。

復帰運動の中核を担つた沖縄教職員会の宮古地区組織が宮古教職員会である。現在の沖縄教組宮古支部の前身であるが、当時の教職員会は労働組合ではなかつたせい、小・中・高校の校長、教頭はじめ、教育長や指導主事、社教主事らも会員で、きわめて多彩な組織であつた。

戦前の教員組織は、県知事を総裁（会長）とする官製の沖縄県教育会で、その傘下にあつて宮古郡教育部会と称していた。戦後、民間団体として再発足し、米軍との関係で、教育

会、教員組合……教職員会と、変遷を重ねていたが、正式に宮古教職員会と称したのは一九五二年、翌五三年には沖繩教職員会の地区組織となり、五六年、事務局制（非常勤）が取られ、翌五七年五月の定期総会で事務局長は常勤となった。その初代の専従事務局長が泰良先生である。

## 2. 「教育会館」の建設

泰良先生は一九二〇（大正九）年九月十七日、平良・西里の生まれである。一九三九（昭和一四）年三月、県立宮古中学校を卒業（七期）後台湾へ渡り、四一年三月、台南師範演習科を出て、敗戦まで台湾各地の国民学校で教鞭を取り、四六年宮古へ引き揚げている。西城小、北中（旧）、宮古高校を歴任したが向学心止み難く、五一年四月、文部省の国費留学生を志望して合格、一橋大学経済学部に入っている。三十歳である。五五年三月卒業後は「琉球政府」入りを希望したようだが、在学中の「復帰運動」が原因で入庁できず（与那覇寛長「宮国泰良氏を悼む」）、しばらく那覇商業高校で教鞭をとったのち、宮古高校に移っている。宮古高校に在職中、教職員会初の専従事務局長に選任されたものである。

これからが泰良先生の本領といえようか。会長勤務校持ちまわりであった事務局を市街地の民家を借り受けて常設し、情宣活動を強化するために、機関紙『教育時報』印刷所の確保、会活動拠点づくりのための会館建設等である。一九五九年現在のレストラン・クールの向かいに建設された宮古教育

会館は、当時としては通りはもとより近隣でも初めての鉄筋コンクリート二階建てで、遠方からもよく見える建物であった。教育研究活動はじめ、教職員の福利増進、社会的・経済的・政治的地位向上の拠点であったばかりでなく、祖国復帰運動はもとより、宮古におけるあらゆる大衆運動、原水禁・平和運動の拠点として常時様々な人が出入りしていた。

## 3. 革新運動の先導的役割

一九六〇年四月二十八日、那覇市久茂地のタイムスホールで、沖繩県祖国復帰協議会が結成された。宮古連合支部は同日午後五時半、北小校庭におよそ一千数百名の郡民が参集して結成されている。支部長には宮国泰良先生が選任された。お人柄にくわえて、教職員会唯一の専従役員ということも理由であろう。副会長二人は青年団と官公労代表である。当日の宣言決議は、「鉄の団結の下に民族悲願達成のため闘うことを宣言し」て、次の三項目を決議している。

- 一、われわれは対日講和条約第三条の廃棄又は権利の放棄による祖国への完全復帰を期す。
- 一、われわれは祖国復帰に備えて万全の体制を固める。
- 一、われわれは如何なる障害をも克服して祖国復帰が実現するまで運動を継続する。

こうして泰良先生は教職員会活動、祖国復帰運動はじめ、宮古の様々な大衆運動、革新陣営の先頭に立つことになる。まさにこの時期の宮古におけるすぐれた組織者、指導者とし

て活動したといっても過言ではない。一九六四年九月までその任にあつたが、その間『宮古教育時報』の紙面刷新をはかり、一九六一年九月には『週刊宮古』を発行し、退任後の一九六六年八月には『宮古新聞』を発行するなど革新運動の先導的役割を果たしている。

#### 4. 一千人の弔問者

日ごろは口数少ない先生がひとたび演壇に立てば雄弁、理路整然として聞く者を魅了したものである。くわえて私利私欲のない清廉潔白ゆえに、一九六〇年、六二年、六五年と三度び立法院選挙に擁立され、悲運をなめている。復帰運動の一環として取り組まれた自治権拡大―主席公選は実現し、一九六八年十二月一日沖縄教職員会長・屋良朝苗が就任した。四月以来大神小中に赴任していた泰良先生は同日請われて特別職の宮古地方庁長に就任し、宮古支庁と機構替えしたあとも支庁長として、七八年七月まで勤務している。

一九八七年五月二二日病没、六六歳。二四日祥雲寺での告別式の参列者はおよそ一千人と報道されている。後日、地元紙には、与那覇寛長、富永裕夫、池村正義、友利玄位、友利定雄氏らが弔辞を寄せている。「宮古郷土史研究会報」一九三号、二〇一二・十一・十二

#### 物理学者

垣花秀武（一九二〇～二〇一七）

一月二七日は宮古ゆかりの世界的な核物理学者・垣花秀武（東京工業大学名誉教授の三回忌に当たる。二〇一七年一月二七日、九六歳でのご他界である。十七歳、旧制一高に入学したところから「自然科学の道」と「人間を理解し尊重し、社会・政治を正す道」の二つを生涯求めつづけたと伝えられている。

・原子力の権威

教授の父・故伸直（旧名恵達）は、白川氏支流東川根の、最後の砂川大首里大屋子・垣花恵忠の四男、沖縄県師範学校を中退して上京したもよう。母は山梨県出身で、教授は一九二〇（大正九）年六月八日、東京で生まれ育っている。第一高等学校から東京帝国大学理学部化学科を卒え、戦中は、理化学研究所で仁科芳雄理博のもとで、研究に従事している。

戦後は、東大助手をへて、東京工業大学助教授、同教授、名古屋大学教授、上智大学教授等を歴任し、その間、文部省在外研究員として、スウェーデン、オーストリア、ドイツ、イギリス、アメリカに滞在している。その後は日本学術会議会員、日本原子力学会副会長、国際原子力機関（IAEA）次長等もつとめ、日本を代表する原子力の権威である。

・略歴と著書等

#### （略歴）

一九四四（昭和十九）年 第一高等学校をへて、東京帝国大学理学部化学科卒。戦中は、理化学研究所で、仁科芳雄理博のもと、湯川秀樹、朝永振一郎教授らと原子物理学を研究。

戦後は、東京大学助手をへて、量子化学でウイン大学、ストックホルム工科大学、アメリカのアイオワ大学原子力研究所等に招かれる。

一九五一年 「イオン交換」で理学博士号取得

一九五二年 名古屋大学理学部助教授

一九五四年 文部省在外研究員として、スウェーデン、オーストリア、ドイツ、イギリス、アメリカに

滞在、研究。

一九五八年 東京工業大学教授、同大学原子炉工学研究所

長、同大学名誉教授

一九七七〜八〇年 国際原子力機関（IAEA）事務次長

一九八〇年 名古屋大学教授、同大学プラズマ研究所長

一九八四年 上智大学理工学部教授

さらに日本海水学会長、若狭湾エネルギー研究センター理事長、亜熱帯総合研究所理事長、沖縄県対米請求権事業協会顧問等を歴任

〈著書・編著書〉

〔著書〕『人類の知的遺産 27 イグナティウス・デ・ロヨラ』

講談社 一九八四年、『叢書現代の宗教 宗教と科学的真理』

岩波書店 一九九九年、『奇会新井白石とシドテイ』講談社

二〇〇一年

〔共編著〕『イオン交換樹脂 基本操作と応用』本田雅健・吉

野諭吉共編 広川書店 一九五五年、『アイソトープの知識』

大滝仁志共著 コロナ社 一九六〇年、『最新イオン交換』

成田耕造共編 広川書店 一九六〇年、『無機化学』吉野諭

吉・福富博共著 広川書店 一九六五年、『イオン交換入門』

森芳弘共著 広川書店 一九六九年、『現代の省察』森有正

共著 春秋社 一九六九年、『原子力と国際政治 核不拡散

政策論』川上幸一共編 白桃書房 一九八六年

・沖縄への親近感

教授の幼少年期の自宅には、進学のため上京した沖縄県（宮古）の若ものたちが常時出入りしていたこともあって、「沖縄の気質や香り」は引きついでいて、一九七〇年ごろ初めて

来県し、沖縄への「親近感も一層増して」いたという（『琉球

新報』一九八五・七・二六）

一九九〇年一月、東京工業大学名誉教授・上智大学教授当時来県したときは、津留健二県教育次長、仲井真弘多沖縄電力常務と「科学の未来は沖縄そして青少年への期待」をテーマにてい談している（肩書は何れも当時）。

一九九五年七月には名護市で開かれた日本マクロエンジニアリング学会沖縄記念大会の「持続可能な開発のためのシンポジウム」で、「海洋深層水と沖縄」と題して特別講演している。同年十月十三日には、宮古を訪れ、ホテル・アートルで、平良市と沖縄県対米請求権事業協会との共催で「二十一世紀に向けたふるさとへの提言」と題して講演している。亡き父親のふるさと初訪問のせいか、きわめて私的な話題も公表し

ておられる。

・「垣花」姓に誇り

——父は、大正の初めごろ、九州をへて東京へ出てきている。父方の祖父は沖繩がもつとも大変なとき、大事な役割を長くつとめたようだ。子どもには上海の東亜同文書院を出たものや、台湾や千葉県で体育教師（孫）をしていたものもいる。母の実家は武田信玄の家系で、三百年徳川家には仕えなかったようだ。明治になって県会議長をしていたが、その長女が宮古の男と大恋愛をして生まれたのが私です。

娘は上智大学で日本の祭りを研究していたが、狩俣や大神の調査もしたようだ。結婚しても夫婦別姓で「垣花」を名乗っている。私も垣花姓に誇りを持っている。（以下略）

〔付記〕本稿で紹介した垣花教授の略歴・著書等は、大分県在住・仲宗根玄吉医博や宮川耕次氏の協力を得ました。記して感謝します。（「宮古郷土史研究会報」二三二号、二〇一九・三・十一）

### 教育者・地域史研究

渡久山春好（一九二二～二〇二二）

生涯のすべてを多良間村を中心に宮古圏域の教育、とりわけ文化財や地域史研究に尽力された渡久山春好先生が5月8日、愛知県小牧市のご子息・好一氏宅で永眠された。享年92

歳。

春好先生は、1921（大正10）年10月15日、多良間村字塩川で、父春令・母ヤマの長男として出生している。敗戦直後の1946（昭和21）年6月から母校の多良間小を振り出しに教職につき、水納小中をへて、再び母校、ついで砂川小両校で教頭、1973年4月～82年3月、定年退職まで9カ年、母校の校長をつとめられた。

その間、慶應義塾大学文学部通信教育部で歴史を専攻し、1967年卒業後は「三田史学会」に籍をおいて、教職の傍ら地域史研究に専念しておられる。同年、早くも故藤村市政、故大山春翠、本村恵真氏、それに、仲筋・塩川両字長らが加わって「史跡保存会」を設立し、文化財愛護の啓蒙につとめている。こうした活動は村当局からも高く評価され、1970年には多良間村文化財調査委員会が発足、74～75年には久米島について県内二番め、国の文化財愛護モデル地区に指定されている。

38年に及ぶ教職を終えた春好先生を待っていたかのように、村当局は、教育長、教育委員長、ふるさと民俗学習館長と、引きつづき要職を委嘱している。教育長在職中は教育行政全般の中核を担いながら、なお特筆されるひとつに『多良間村史』の編さん事業がある。村当局の方針を反映しての事業ではあるが、村制施行70周年記念事業としての計画である。1983年1月、発足した村史編集委員会は藤村市政委

員長のもと16人で構成されているが、地元在住者は半数の8人で、他の半数は村外研究者が委嘱されている。離島の、小規模自治体の財政状況からは当時としても並々ならぬ英断であったといえよう。

初期四巻構想で始まった村史編さん事業は3年後の86年3月、最初に刊行された第二巻資料編1「王国時代の記録」に掲載された「学問的水準を保ちながらも、村民にも理解できるといふようなわかりやすい村史づくり」（『発行にあたって』教育長 渡久山春好）と明記されている。内外の評判はよく、沖縄タイムス社から、同年の「特別出版文化賞」を贈られている。

多良間村に関わる史資料の調査・収集、研究の深まりにもなつて発刊構想は大きくふくらみ、最終的には第六巻で完結している。第三巻「近現代の社会と生活」、第四巻「民俗」、第五巻「芸能」、第六巻「多良間の系図並に勤書・古文書・御嶽・古謡」で、いずれも資料編である。こうして第一巻通史編は「島のあゆみ」の表題で刊行された。同巻の「序文」は、安里茂夫村長と、教育委員会を任期満了で去っていた春好先生が編集委員長の肩書で執筆しておられる。

「八月踊り」（多良間島の豊年祭）と「スツプブナカ」は広く内外に知られた多良間村の二大民俗行事である。春好先生がいまだ教職におられた、ある年の「八月踊り」では、組踊りの解説は仲筋字が大山春翠、塩川字は春好先生が担当し

ておられた。村外からの一時帰省客はじめ、多くの見学者で限られた宿泊施設は空きがなく、春好先生のお宅に泊めていただいたことがある。この突然の闖入者ちゆうにゅうしやに、サダ夫人はいつも笑顔で三食手料理を振る舞い、春好先生はノートを広げて、多良間の歴史や民俗等について熱心にご教示くださった。以来多良間出張のたびにお宅を訪れるのを習わしにしてきた。あの温顔で、誠実な春好先生はもういない。藤村、大山両先生らと多良間への思いを談笑しておられるのであろうか。安らかにお休みください。合掌。（『宮古毎日新聞』二〇一二年六月・十五）

#### 教育者・地域史研究

砂川明芳（一九二五～二〇一〇）

宮古歴史の研究に示唆多き提言を発信しつづけた砂川明芳大兄が、3月14日忽然として逝かれた。戦国武将をしのばせる豪放磊落ちやうたいくと、謙虚で繊細な神経を合わせ持つ比類なき大兄はもういない。「巨星落つ」の思いである。

宮古史研究の両碩学、慶世村恒任と稲村賢敷の諸論考はそらんじておられるのではと思うほどに読み込んでおられ、自説については「今までの郷土史（宮古の）で、おろそかにしてきた部分に、私なりにふれたつもりです。研究というよりも考察というのがほんとの処です」（『宮古島郷土史考』あと

がき」と記しておられる。

大兄の論考を初めて手にしたのは、1959年4月、宮古水産高校職員の同人誌『つどい』創刊号の二つの論考である。

「創作 ある敗北」と「甘蔗伝来」考」、ついで翌60年3月、同二号の「異説 東那利金考」で、いずれも宮古史を独自の視点で考察している。早くも同月末には「特集 多良間への報告」と題して三号が刊行され、表紙から最終60ページの年表まで、3ミリ方眼紙の極細字を用いたのであるうか、大兄一人の字ですべて埋めつくされている。「多良間騒動」どなたか砂川ウルカシユウの主を知らないか」に始まって、「ナゾの女 大阿母 保奈利考」十六世紀のナゾく仲宗根豊見親と土原豊見親「多良間じま見て歩き」「本文の結び」とつづく。翌61年3月の四号には、「宮古人は犬の子く犬の子・蛇の子・倭人の子」で、大兄の問題意識とお人柄を示す面目躍如たる展開である。

同年7月、故宮国泰良が創刊した『週刊宮古』には、二号から二三号までの二二回、一回読み切りの「裸の郷土史」を連載、宮古史への関心を高めている。1973年6月、平良市文化財調査委員、翌74年7月、同市史編さん委員として、これまで以上に宮古中をめぐって史資料の調査・収集に当たり、多くの論考を発表している。

1976年9月、初の単独著書『宮古島郷土史考』が出版された。A5版、91ページ、全文手書きだが、プロの印刷・製本で読みやすい。「南への連想」「密牙古考」「与那覇原の根拠地」「荷川取考」「二条の道から」「仮説ポイント・0」以上六つの柱立てで、興味深いテーマばかりである。「南への連想」は、宮古方言を駆使して、香料諸島に移り住んだ中国系の航海者たちがマレー系種族と婚姻を重ねていて、何らかの理由で13世紀ごろ宮古へ移り住む。のちに中山（琉球）に朝貢するようになって、琉球正史に「これによりて中山始めて強し」と明記される要因をなしたであろうとの展開は、推理小説以上に興味をそそる。

翌77年3月には、この論証方式で、「宮古島からの報告く邪馬台国へのアプローチ」を発表、これをもとに改稿して『邪馬台国』二号（79・10）に「邪馬老国への接近く僻地理での試み」と題して発表している。

このあと『宮古島郷土史考』は、第二部（1981・9）第三部（84・9）、第四部（86・7）、第五部（89・10）、第六部（91・5）、第七部（93・6）と、精力的に刊行されている。すべて私家版である。宮古島のほぼ中央に位置する野原岳や「ぶばかり石」などの主要地を基点にさまざまな線を引いて三角形や四角形をつくり、「テイダ（太陽）の線」、「ア



ズ（按司）の線」などと命名、宮古史解明の新たな緒口をさぐる「明芳史学」とも言うべき他の追隨を許さぬ独自の世界である。

大兄の宮古史への切り口は、3月23日付本紙「行雲流水」も指摘しているように、宮古統治は与那覇勢頭が目黒盛より先、「宮古島記事仕次」の原著者「忠導氏おやけ屋の大王」は10世玄賢、宮古上布（綾錆布）の創始者と伝えられる稲石の夫真栄は「白川氏7世恵伝」と同一人物であろうなど、大兄ならではの鋭い考察である。

明芳大兄よ、日ごろ敬愛してやまなかつた長姉カメ、長兄明文、次兄明高、三兄明増氏らのもとで静かにお休みください。今はただご冥福を祈るばかりです。84歳。合掌。（「宮古毎日新聞」二〇一〇・三・二八）

#### 教育者・地域史研究

佐渡山正吉（一九二七～二〇一七）

六十有余年、各方面にわたってご指導いただいた、佐渡山正吉大兄が三月二三日突然ご他界された。その日夕方、六女の裕子さんからの電話で知らされた。九〇歳という年令には不足はないのかも知れないが、ショックであった。宮古の歴史や文化を語る現役の最長老であり、痛恨の極みである。大兄

には市町村合併前の旧平良市時代から、文化財保護、市史編さん、社会科学副読本「ひらら」の編集、博物館協議会など、文化行政のほとんどの分野で、ご指導いただいた。同じころ宮古郷土史研究会が設立され、さらに一九八四年設立された文化協会でもつねにご一緒させていただいた。庶民性ゆたかな、あたたかみのある方であった。筆舌に尽くし難い訃報である。

#### 1. 宮古連合区での出会い

大兄は一九二七（昭和二）年十一月六日狩俣の生まれ。初めてお会いしたのは一九五七年十月である。同月一日付で、地元新聞社に入った初日早朝から、準備されていた名刺を持ち、編集次長に伴われて挨拶まわりに出かけた。徒歩で宮古地方庁を皮切りに、市街地の官公庁はじめ、主要商社めぐりである。地方庁と北小のそれぞれ裏の接する位置に、正式名称は宮古連合区教育委員会事務局はあった。一般には宮古教育長事務所として通称されていたが、大兄とはそこでお会いしている。このときは名刺を交換しただけであったが、のちに同年九月一日付け「巡回教師」の職名で配属されたばかりであることを知った。

社教主事をしておられた故譜久村寛仁先生が、翌一九五八年四月一日付で、池間小中学校長で転出されるさい、請われ

たのであろうか、大兄も一緒に池間小教頭で転出しておられる。同校はそのころ文教局指定の実験学校（純漁村における職業教育）で、三学期の研究発表当日は雨もようの寒い日であったが、大兄からは学校の状況ばかりでなく、漁業の島・池間のあれこれについてご教示をいただいた。それ以来、大兄は転勤ごとに行き先々の学校から電話を下さり、何かにつけて取材の便宜を図るばかりでなく、様々な地域の話題を聞かせてくれたものである。

## 2. 多彩な話題を聞く

一九六四年七月、請われるままに宮古教職員会に移ったが、それからはお会いする機会が一層ふえていった。確か小学校社会科研究会（「小社研」）の役員をしておられたのではなからうか。夏休みのある日、小学校の先生方が大型バス一台を満杯にして「史跡めぐり」のさい便乗させてもらったことがあった。

案内役はそのころ砂川小だか西辺小の校長をしておられた故下地かおる先生で、謹言居士とばかり思っていたかおる先生の「イナカなるもミヤコなり」といったメイ調子を聞いたのもこのときであった。城辺の上比屋山では、遠見跡の石垣の上に立って、「倭寇遺跡」説への反論を展開しておられた。そのさいかおる先生の介添役をしておられたのが、いささか

心もとないが、故砂川禎男先生と大兄のお二方であったように記憶している。

上野小学校校長時代には、校内菜園の収穫物を児童の給食に供するとあって、ご相伴にあずかったものである。食後であったか、「学校沿革誌」を開いて、新里小創立当初の出来ごとをご披露に及ぶとともに、明治中〜後期同校の校長であった熊本県出身の故下川貞文先生のエピソードを聞かせてもらった。下川校長はそれよりさき平良小学校在職中、宮古近代史に名を残す、立津春方、富盛寛卓、仲松恵知らを教えた、人格高潔で広く知られており、新里小在職中に病没しておられる。

## 3. 公私共に多面的なご指導

一九七四年四月、このときも請われて旧平良市教育委員会に移ってからは、職務との関連で、さらにお会いする機会がふえ、各方面にわたってご協力、ご指導をいただいた。文化財保護審議会委員長、市史編さん委員長として、宮古全域にわたって文化財調査や資料収集に歩かれ、その結果、必然的に生ずる資料の整理、執筆と、多面にわたってのお力添えである。一九九〇年四月開館間もない総合博物館に移ったときには、同館協議会長として資料整理や企画展など、つねに積極的にご提言をいただいた。

時には休日にもかかわらず、大兄のつごうもろくに聞かずに自宅まで押しかけ、判読仕難い古文書の読み下しなど、ご教示をいただいている。書家としても著名であり、多くのくずし字の字典を持ち出して、判読にお付き合いただいたものである。そのたびに奥さまやお嬢さま方のお心のこもったおもてなしにあずかったものだ。そのさいのご家族の所作、立ち居振る舞いは今もあざやかに脳裏に浮かんでいる。大兄ご夫妻の日ごろの反映であつたらう。そのことは著書「沖繩・宮古のことわざ」(ひるぎ社・一九九八年)を手にした誰もが納得されよう。見分の広さ、深さ、行き届いた引用、不遜な言い方だが心にくいばかりである。ふるさと狩俣への思いの深さもきわだつておられた。

大兄をしつかり支えて下さったカズ子奥さまはじめ、ご家族の皆さまに心からの敬意を表するとともに、ご冥福をいのるものである。合掌。「宮古郷土史研究会報」二二〇号、二〇一七・五・一五)

〈付記〉佐渡山正吉著

「沖繩・宮古のことわざ」表紙帯にひるぎ社・一九九八年 著者は、旧藩時代に生まれた祖父ゆずりの該博な知識を駆使して、宮古の諺百点をまとめている。しかも方言のもつ微

妙なニュアンスを損なうことなく、過不足ない共通語の表現と並列させることに成功している。地元紙に二年近く連載したのち十年掌中の玉の如くあたためて語源の解明と、それぞれの諺の生まれた背景——歴史と民俗まで考察した珠玉の結晶である。読者は、地域性ゆたかな宮古の諺が、広く普遍性をもっているのに目を見張ることであらう。

#### 教育者

伊良皆春宏(一九二九〜二〇一七)

学校教育はもとより、社会教育領域でも多くのすぐれた実績を残された、伊良皆春宏先輩が年明け早々の一月三日早朝、ご永眠された。八七歳である。先輩とは一九六〇年代から親しく関わり、一九七〇年代には一時期職場を同じくするなど、少なからずご指導を受けたひとりである。

#### 1. 南小校長で定年

先輩は一九二九(昭和四)年十一月三〇日、旧平良市の生まれ。一九四六年三月、県立宮古中学校の戦後最初の卒業生である(15期)。文部行政の戦時政策で、修学年限五年制が四年制に短縮されていたこともあって、戦後の宮古中学は、宮古地域独自の教育政策で宮古高校に改められており、同年十一月、五か月間の補修科を設けて学習不足を補っている。

学業半ばで軍隊に召集され、あるいは志願していった生還者の多くも補修を受けたようだ。大正末期から昭和一ケタ前半生まれの人たちで、確認できるだけでも七〇余人修了している。

先輩は補習科修了後しばらく宮古民政府に勤めたのち、一九四八年四月開設された宮古教員養成所に入所し、翌一九四九年三月修了とともに久松小学校を振り出しに、その後の四年にわたる長い教職生活を送っている。教育行政のひずみに加えて多くの教職員と、その後続の予備軍たる若者の多くが戦争で失われた敗戦直後の、過渡期のもたらした二度とない歴史的体験者たちといえよう。

その後、平一小、鏡原小、北小をへて、再び久松小、平一小と勤務している。鏡原小在職中には六か月間、研究教員として東京都港区立の小学校に派遣され、「学級経営領域の研究」を深めている。一九七四年四月、旧平良市教育委員会に指導課が新設されたとき、松原清吉氏とともに指導主事として出向している。三年後、久松小教頭で転出し、一九八〇年四月には指導課長として再び教育委員会に入り、一九八三年四月、池間小、一九八五年十一月、新設の南小校長を歴任して、一九九〇（平成二）年三月、定年退職している。

## 2. 各種文化行政に参画

一九七四年四月、旧平良市教育委員会の指導主事時代は、公選の教育委員長も勤めた平良重信市長のもと、助役が宮古教職員会事務局長等をへて、教育長を勤めた池村正義、教育長は平一小校長から就任した砂川禎男、指導課長は宮古連合区で指導主事を務めた松原清吉氏ら（いずれも故人）。誰方も先輩が現場時代の先輩であり、同僚である。何事であれ「ツ・カー」の親しい間柄であったといえよう。

就任したその年から、戦後宮古の文化行政の第二次振興期といっても過言ではないほど、現在につづく多彩な新しい企画が始まっている。文化財保護行政を軌道にのせ、市史編さん、市民総合文化祭、少年少女合唱団、宮古まつり、関東・関西ふるさとまつりなど、これらはすべてこの年から始まっている。

先輩らの就任した二週間後に指導課入りした私は、その時のご縁で、二〇一〇年一月、先輩が「教育功労」で叙勲を受けたときの祝賀会で、主催者の沖縄県退職教員会宮古支部に請われて、「受賞者を語る」大役を仰せつかったものである。その時の紹介文が残っており、それには市民総合文化祭等に関連して一歩次のようなくだりがある。

## 3. 空き教室を「郷土資料室」に活用

伊良皆先生は、通常の学校訪問とは別に、市立の小・中学

校はもとより、県立の高等学校も訪問して、校長をはじめ、関係する先生方に直接お会いして、市民総合文化祭への出品並びに出演をお願いしておられました。そのころ私も指導課に在籍しておりましたので、伊良皆先生のお供をして学校めぐりをしたものでした。(中略)その後、伊良皆先生は学校現場に戻りましたが、池間小学校長のときは、空き教室を活用して「郷土資料室」を開設しておられます。ご承知のように、池間は宮古におけるカツオ漁業の発祥地であり、戦前から「漁業の島」として、広く県内外に知られております。児童の父母はじめ、地域社会の積極的な協力のもと、漁業に関わる様々な道具や資料を収集して展示し、児童生徒に父母や祖父母―池間の先人たちの生きた歴史を伝えておられました。―

先輩の教育(行政)者としての力量を高く評価していた行政当局は、定年した先輩をそのまま野に埋もれさせるはずはない。一九九〇年二月の定年後は、中央公民館長、教育委員、教育委員長、教育長と、平良市の重要ポストに起用している。誰もが異論なく認める必然の処遇といえよう。

#### 4. 恵まれた環境

ついでに付言すると、先輩のセツ夫人の父君・岳父は、宮古独自の教育基本法等を制定した砂川恵敷、与那覇寛長(お二人とも故人)らとともに、戦後「ゼロからの出発」と言わ

れた宮古教育の復興に専心した与那覇春吉である。さらに言えば理科教育で著名な田場重雄(久松中学校長在職中病没)は義兄である。先輩は天性の資質に加えて、このような恵まれた環境によって、その才能を発揮されていたのであろう。

伊良皆春宏先輩! 安らかにお休み下さい。合掌。(「宮古郷土史研究会報」二一八号二〇一七・一・一八)

#### 労働運動

友利定雄(一九三〇〜二〇一八)

戦後宮古の革新運動Ⅱ民衆運動を語る上で欠かすことのできない幾たりかの先輩方がおられる。5月5日87歳で他界された友利定雄大兄もそのお一人である。

#### 1. 家族ぐるみ(?)の選対

2期8年の任期中に、電気・水道・港湾の三大事業を完成させて平良市長を退任する石原雅太郎の後任を選出する選挙が1957年11月施行された。当時は首長が代わるたびに管理職はじめ、一般職に至るまで大方入れ替わる。この悪しき慣例を避けるための配慮であったろう、石原市長は退任を前にして職員組合の結成をうながしたと伝えられている。旧平良市職の結成当初「御用組合」などと、言われのない陰口がささやかれた背景である。

友利大兄はそのとき役員に選出されていたのであろうか、その辺の記憶は定かではないが、1960年4月、沖縄県祖国復帰協議会宮古支部（宮古復帰協）が結成されたときは市職を代表して執行委員をつとめ、ほどなく沖縄県自治労の専従書記長として那覇へ出向いている。1期で退任されたのであろうか、1962年11月、米軍全面占領下6度目の立法院選挙のときは、社大党公認・宮国泰良候補の、事実上の選対本部長のような形で采配を振っていた。

今のレストラン・クルールの位置に大きな木造瓦葺き家がある、友利大兄一家が借りていたが、選挙前に大兄一家は奥座敷に引っ込んで、表座敷はすべて選挙事務所を提供されていた。借家住まいとはいえず、住居が丸ごと選挙事務所に転用されていたともいえよう。

## 2. 街頭デモの統制委員長

対日講和条約第三条で沖縄県は引きつづき米軍の全面占領下におかれ、一九六〇年代には、条約発効の「4・28」には毎年那覇の県民総決起大会に呼応して、北小校庭で宮古郡民総決起大会が開かれていた。集会後は市中デモである。市場通り―下里通り―マクラム通り―西里通りをへて北小に戻り解散する。時に数千人、最低でも千人規模の一大市中デモの統制委員長は大抵友利大兄の担当ではなかったか。とかく隊

列を乱しがちな若もの集団を隊列に引き戻す大兄の統制ぶりはみごとなものであった。

「壮大な祖国復帰（沖縄返還）運動で、大兄とともにその核を担っていた大方は既に故人になっておられる。官公労では、川満和夫、友利玄位、喜久川政永、全通では、内間一光、市職では、前里礼伝、仲里達雄氏ら。教職員会では、与那覇寛長、宮国泰良、砂川明芳、池村正義、池城恵正、花城恵喜、安谷屋豪一氏ら。戦後宮古の革新運動に大きな足跡を残した友利大兄の戦友たちである。もとより背後では良子夫人がしっかりと支えていたことであろう。

## 3. 「復帰協」存続を主張

1962年、キビ代闘争、1965年、製糖会社合併反対闘争、その延長線上の労農共闘会議でも、大兄はつねに闘争の発展のために積極的な提言をし大役を担っておられた。1972年5月、沖縄県の「施政権」が返還され、復帰協の存続をめぐる論議では、米軍基地が存続する限り解散すべきではないと主張した側の一人であった。

宮古郷土史研究会に所属していたときは、定例研究会で、「戦後宮古の労働運動と大衆運動」『久松五勇士』の行程と表彰「宮古の糖業と農民運動」等を発表している。戦後宮古（＝沖縄県）のもっとも高揚した時代を多くの同志とともに

駆け抜けた友利定雄大兄、安らかにお休み下さい。合掌。(

「宮古毎日新聞」二〇一八・五・二七)

### 教育者・文芸活動

松原清吉(一九三二〜二〇一六)

大戦後の一九五〇年代後半以後の宮古の教育界はもとより、文化各方面に重要な足跡を残す松原清吉大兄が一〇月二日に他界された。享年八六歳。大兄は高校の国語教師の傍ら、実名とは別に「原龍次」の筆名でも多くの作品を宮古内外の紙誌に発表したことでも知られている。

大兄は一九三一(昭和六)年二月平良の近郊・松原で生まれている。一九四三年四月、久松小学校から旧制の県立宮古中学に入学し、二年生から三年生にかけては宮古布陣の軍隊に全校生徒とともに召集され、戦火に巻き込まれている。米英軍の連日の猛爆の合い間をぬって、一四歳の通信兵(二等兵)としての猛訓練に明け暮れるなかで、松原の生家は直撃弾を受けて吹っ飛んでいたという。

#### 1. 「琉大文学」等に参画

戦後は中学四年終了で、ほどなく発足した新制宮古高校を卒業し、しばらく狩俣小中で代用教員ののち、一九五〇年四月創立の琉球大学国文学科に入学している。最上級学年の四

年生のとき、新川明、川満信一、岡本恵徳……らと「文芸クラブ」を創設して、「原龍次」の筆名で『琉大文学』に多くの作品を発表したのである。いわゆる純文学志向であったように、  
「病床日記」「運命」「漁夫」「松助の自伝」「綾子」などの作品群が知られている。確認したわけではないが、筆名の原龍次は芥川龍之介にあやかっているのではなからうか。

一九五四年三月、卒業後は、知念高校、宮古農林、宮古水産高校で国語科を担当したが、その間にも主として宮古教職員会(現沖教組宮古支部)の機関紙『宮古教育時報』に作品を発表している。「水のない河」「影のない人」「異説 仲宗根豊見親」などの小説をはじめ、毎月のようにエッセイ等の作品を発表している。一九五八年七月には、宮国泰誠、吉村玄得(松下仁)、本村玄典(武史)(以上いずれも故人)、伊志嶺亮兄らと「あざみ文学同人」を発足させ、同人誌「あざみ」をだしている。

一九六一年一〇月〜翌六二年三月まで、宮古連合区教育委員会で、第二次文部省派遣教育指導員の田中久直氏のもとで、国語科研修委員、四月からは指導主事として八年勤続している。このころ沖縄国語教育研究会宮古支部長も担当し、東京教育大学(現・筑波大学)で一年間指導主事としての研修も積んでいる。

## 2. 学校訪問に便乗して……

私は、一九六四年七月から、請われるままに宮古教職員会の事務局に入り、『宮古教育時報』を中心に情宣活動に従事したが、松原大兄とともに連合区の指導主事をしておられた故田場重雄先生のお二人について、宮古中の学校を訪問したものである。幼稚園から、小・中・高校はもとより、教育委員会、図書館に至るまで、教育行政の関与する機関の職員はすべて教職員会員であったからで、指導主事の訪問指導に便乗して会員の職場訪問、取材をしていた。一九六〇年四月に結成された沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）を中心にした、歴史に残る壮大な「祖国復帰」（沖縄返還）運動のもっとも高揚した時期と重なり、筆舌に尽し難いほど多忙な日々で、大神池間、来間はもとより、多良間村まで出向いていた。当時はすべてバスと船である。

## 3. 地元紙の顧問に

松原大兄は一九六九年九月、西城中教頭で八年振り教育現場に戻ったが、一九七四年四月一日付けで、新設の旧平良市教育委員会指導課へ初代課長として、指導主事の伊良皆春宏先生とともに出向し、再び教育行政に従事している。二〇〇五年一〇月、五市町村合併後の宮古島市につながる市民総合文化祭、市史編さん事業、青少年少女合唱団等もすべてこの年

に始まっている。一九七四年の年を戦後第二の文化振興期とよぶゆえんである。私は二週間後の四月一五日から同課で一緒に暮らさせていただいた。

その後の松原大兄は、狩俣中から平良第一小の校長で、一九九一（平成三）年三月、三七年に及ぶ教職生活を終えての定年退職である。それを待っていたかのように、高校・大学の同窓でもある宮古毎日新聞社の、当時の会長・山内啓邦弁護士（故人）に請われたのであろうか、早くも五月には編集顧問として同社に入社している。大兄入社後の文化面の充実など、紙面が年々刷新され、誤植も少なくなつて、より身近な地元紙になってきているのは、大方の認めるところであろう。二〇〇五年には、『宮古毎日新聞五十年史』の編集委員長もつとめ、晩年は編集顧問から、さらに前進して経営全般であらうか、同社相談役として処遇されていたようである。

## 4. 貧しかった時代から

一九九七（平成九）年五月、「平良好児賞」、二〇〇三年五月「宮古ペンクラブ」などの創設にも大きく関与しており、今や宮古の文化各面の隆盛ぶりは隔世の感があるが、松原大兄らがその基礎づくりに奮闘したことは、宮古の戦後文化史に大きく輝いていよう。併せて、衣・食・住ともに極度に貧しかったあの時代から六十余年、大兄をしつかりと守り支え



てこられた、大兄最愛の「髪結いのカミさん」こと、僖美子夫人に心からの賛辞を送り、敬意を表するものである。

松原清吉大兄！ 安らかにお休み下さい。合掌。（宮古郷土史研究会報）二二七号、二〇一六・十一・一四）

〈付記〉「原龍次」大兄をしのぶ

「琉大文学」草創期に関わり、その後40年近く教職にあっても「文学青年」でありつづけた原龍次大兄が10月2日他界された。享年86である。

米軍全面占領下の1953年7月創刊の「琉大文学」には、いずれも筆名であろうが、原龍次はじめ、新井暁、川瀬信、池沢聡、北谷太郎、喜舎場順、笠井門太らの名が見える。当時は新聞・雑誌等の発行は米軍の許可制で、発行のつど米国民（軍）政府と、琉球政府に各4部納入を義務付けられていた。内容が許可条件に違反したときは発行取り消しの警告が出る。「日本復帰の促進又は奨励」のために使用することは完全禁止であった。

原大兄は琉大卒業後は知念高校で国語科を教えていたが、56年4月からは郷里宮古に帰って教壇に立ち、あるいは指導主事として教育行政に携わる傍ら、小説やエッセイを地元紙に発表していた。

74年4月、旧平良市教育委員会に指導課が新設され、初代課長に迎えられたとき、文化財保護行政を軌道に乗せ、市民総合文化祭や市史編さん事業、青少年女合唱団などを手掛けている。あれから四十余年、全て市町村合併後の宮古島市に引き継がれている。

定年退職後は地元新聞社に迎えられて地域紙としての紙面刷新に取り組み、特に文化面の充実に尽力していた。20歳前後の「琉大文学」草創期、同人仲間との切磋琢磨による資質であろうか。

原龍次大兄！ 安らかにお休みください。

（沖縄タイムス）二〇一六・十一・二六）

民衆運動

上原清治（一九三三〜二〇一七）

鏡原出身の上原清治大兄が八月十一日、松枝夫人が二十一日病いのため相ついで他界された。八四歳と八〇歳である。戦後の米軍全面占領下、沖縄県の反戦平和と革新運動について知るものにとつて、惜しみて余りある痛恨のきわみである。

上原大兄は宮古高校は一九五一年三月卒（三期）、同期には著名人が多い。垣花斉ら医師七人、宮国義夫ら弁護士三人、

琉大教授の本永守靖、元県議の下地常政、齒科医の友利恵勇兄らがいる。大方は故人になっておられ、その限りにおいて、大兄のご他界は必ずしも早いとは言えないのかもしれないが、矢張り無念の思いである。

### 1. 琉大を不当な退学処分

高校生のとき、友利恵勇兄とともに、伊志嶺朝茂氏をたずね、教えを乞うたというエピソードが伝えられている。米・英軍の連日の猛爆で、焦土と化した敗戦直後の宮古で、伊志嶺氏はいち早く労働組合を結成して、働く者の生活と権利を守る活動を始めている。宮古で初めてのメーデーを計画し、平良の市街地をデモ行進もしている。伊志嶺氏との出会いは、大兄が早くから労働運動、ひいては平和と革新の運動に関心を寄せていたことをうかがわせるものである。

一九五一年四月、琉球大学へ入り、三年生に進級して間もなく退学させられている。大学当局が米軍の不当な圧力に屈しての処分であったようだ。処分については当時も政治的、社会的に大きな問題になり、現在に至るまで批判的指摘がされている。比屋根照夫琉大名誉教授は、「朝鮮戦争下の反共主義イデオロギーの横行する時代、機関紙『自由』の発行、灯火管制反対運動、原爆展の開催、メーデーへの参加を理由に、『退学』処分を行ったこと自体きわめて異常な事態である」

と指摘している（「琉大事件を問うもの」二〇一〇年）。

### 2. 「復帰運動」の一環として

本土復帰前の一九六〇年十一月、第五回立法院議員選挙のとき、当時宮古教職員会事務局長であった故宮国泰良先生が、社大党公認で立候補し、惜しくも保守系候補に敗退したことがあった。そのとき、推せん演説をした同僚のB君は、選挙後職場に迷惑をかけたくないと断って退職していった。さいわい「琉球政府」の公務員試験にうかつていたが、反政府とみなされたのか、宮古での採用はきわめて困難であった。仕方なく那覇へ転居し、知人のつてもあつてかろうじて就職することができた。

当時は沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）が結成されて間もないころで、「主席公選」や自治権拡大要求はじめ、県民の命と暮らしに関わるあらゆる課題が祖国復帰運動に結びつけられて展開されていた。復帰協の中核を担っていたのは、屋良朝苗氏や喜屋武真栄氏らの所属する沖縄教職員会とともに、沖縄官公労、自治労、全通などの労組であった。

### 3. 社会的弱者に寄りそって

そこでは宮古出身者の多くの先輩が重要な役割を果たして

いた。復帰協の事実上の初代会長をつとめた沖縄官公労中央執行委員長の赤嶺武次（のち県出納長）、書記長の本永寛昭（のち県弁護士会長）、全沖労連書記長の芳澤弘明（のち弁護士、県原水協理事長）ら多彩な顔ぶれであった。これら先輩方の影響もあつたろうか、那覇へ転居し再就職したB君は、労組に加入し活動するなかで役員にも選出される。組合員の働く条件の改善はじめ、祖国復帰（沖縄返還）運動や原水禁・平和運動にも参加していく。知的障害者の福祉や社会的参加を支援する「手をつなぐ育成会」でも積極的な活動をしている。直接聞いたことはないが、こうしたB君の弱者のための諸活動に大兄の影響はなかつたろうか。

一九六一年春（？）、B君は那覇転居にさいして、多くの資料を拙宅へ置いていった。日本の真の独立と民主主義、社会進歩のために東京で出ている新聞や各種資料である。これらは那覇在鏡原の先輩から送られてくるもので、引きつづき受け取ってほしいと言つて、去つていった。

当時、大兄とは面識はなかつたが、ほどなく友利恵勇兄から、宮高同期で、二人で伊志嶺朝茂さんを訪問したこと、琉大退学後は沖縄人民党で活動していること等を聞かされた。

一九八八年版の『南秀同窓会名簿』には、大兄の勤務先は「日本共産党沖縄県委員会」と明記されている。

#### 4. 要職を歴任

死去を伝える報道によれば、大兄は沖縄人民党中央常任委員、機関紙「人民」（週刊）編集長、一九七三年、日本共産党合流後は中央委員、県副委員長を歴任して、二〇〇〇年名誉役員。松枝夫人にしっかりと支えられての諸活動であつたろう。合掌。（「宮古郷土史研究会報」一二三号、二〇一七・九・一一）

#### 国語学者

本永守靖（一九三三〜一九八六）

琉大教育学部教授として在職中に一九八六年一月十四日、永眠した故本永守靖氏の遺稿集がこのほど、生前の同僚らの協力で出版された。題して『琉球圏生活語の研究』である。十余年宮古高校で国語科教育にたずさわり、首里高校から教育研修センター勤務をへて琉球大学に移つてからも、国語教育の研究と実践、さらには琉球方言とりわけ宮古方言の研究と方言研究史の研究を深められた。その間、研究誌や「紀要」等に発表した論考をまとめたものである。

第一章「琉球方言の世界」、第二章「地域社会と国語教育」、

第三章「国語教育と方法」、補章「沖縄の言語生活に関する共

「同研究」の四章構成である。序文は広島大学名誉教授で鳴門教育大学長の野地潤家氏が記している。それによると本永氏は一九七九年九月から翌八〇年二月までの半年間、広島大学教育学部国語研究室で、研究員として国語科教育の研究に従事されている。そのご縁での序文なのであろう。また同書の内容については巻末に、「琉球方言の世界について」名嘉真三成、「国語科教育に関わって」太田昭臣、「若き友人のために」會澤卓司、「共同研究者としての本永靖先生」東江平之、「一日半」の差」會澤卓司氏らが「解説」している。野地学長の「序文」同様に、故人の国語科教育者並びに言語研究者としての専門領域に言及しながらもその人柄についても心あたたまる友情の世界を披露して、すがすがしい感をそそる。

また、同書については、すでに藤原幸男琉大教授が「沖縄の言語文化を考える」を『琉球新報』夕刊（二月七日）に、加治工真市県立芸大教授が「宮古方言研究に徹す」を『沖縄タイムス』夕刊（二月二十二日）に、それぞれ「書評」を寄せておられる。さきの解説と両教授の書評で、本永氏の教育並びに研究世界は門外漢からみてもほゞ言いつくしているように思われる。これ以上同書についてあれこれするのはそれこそ僭越の限りといえそうだ。また私の世界にあっても、故人の幼少期からについて知る同期生―昭和八年生で宮古高校

三期卒の皆さんの多くが壮健で各界に活躍しておられる。この分野についてふれるのもどうやら出過ぎたことになりそうである。

こうした愚にもつかぬことを考えながら、あれこれひろいよみしているうちに、同書には現れていないいくつかのことを思いだした。きっかけは奥付け上段の著者略歴である。そこにはまさしく故人の人柄にふさわしく、生卒をふくめてわずかに八行記されている。つぎのとおりである。

一九三三年 沖縄県平良市に生れる

一九五三年 琉球大学教育学部師範科卒

一九五七年 愛媛大学教育学部国語科卒、宮古高等学校教

#### 論

一九六八年 琉球政府立沖縄教育研修センター指導主事

一九七二年 琉球大学教育学部講師

一九七五年 同助教授

一九八二年 同教授

一九八六年 一月没

確か宮古高校在職中に研究教員として茨城県の高校に派遣されたことがあつたはずである。沖縄県の本土復帰前であり、本土派遣研究教員は当時ある種の榮譽とみなされていたよう

に思う。念のために『宮古教育時報』縮刷版をめくってみると、矢張りでている。一九六五年四月に茨城県立古河第一高校に派遣されている。改めて巻末の「初出一覧」をみると、第三章第三節「高校作文の基本指導―原理と方法」が、研究報告として収録されている。さすが編者たち、本永氏の足跡をたんねんに追って、見落としはなかったのである。同書収録論考のなかでもっとも早く、それ以外はすべて一九七一年以降、八四年までである。

野地教授の序文にでている広島大学での半年間の国語科研究員としての足跡も略歴にはない。序文をいたたくほどのかわりをもった広島大学さえもないのだから、古河第一高校がはずされてもおかしくはなさそうだ。それはともかく本永氏は当時の通信のなかで、「こちらの学校教育に対して完全に兜をぬがざるを得ないのはしつけ教育の面でしょう。これはどんなにじたばたしてもおいつけそうもない。学力差の生ずる原因の一つもこのあたりにあるようです」と記している。古い資料をあさったついでに、本永氏の人柄を示す話題をひとつ、二つひろっておきたい。

愛媛大学を卒えて宮古高校に赴任してちょうど一年め、一九五八年三月一日発行の生徒会文芸誌『南秀』一〇号に、『感動し得る心』を寄せ、「光明に満ちた青春時代に、感性を美し

く育てあげ、人生への強い関心を持つてこそ、人生は魅力あるものとなり、生活にもはりがでるのだということを強調したい」と記している。さらに一九六六年一月十六日付『宮高新聞』には「生徒会十年」と題して寄稿、「教科学習と生徒会活動やクラブ活動などの両立はむずかしい。しかし、やはり青春を力いっぱい生き、個性を開花させ真の人間の成長をはかるためには、教科の学習に限定せず広く学習の場を求めべきであろう」と記している。

感性を美しく育てあげ人生に強い関心をもて、青春を力いっぱい生きて個性を開花させよ、と言いつづけた本永氏、平良の街の二つも先の四辻から「やあ！」と手を振り声をかけてくれた、あの人なつつこい笑顔をみなくなつて、早や八年になるといふ。

二月十二日首里で催された遺稿集出版に合わせたの「本永守靖先生を偲ぶ会」で、和子夫人は、夫とともに過ごした二十余年は、人生八十年にも匹敵する充実した生活であった、旨のあいさつをしておられた。感銘深い一夜であった。(一九三三・八・九く八六・一・十四去、五二歳)(宮古郷土史研究会報「八六号、一九九四・三・一二、」沖縄県・宮古史料の旅」収録・一九九五)

ハンセン病と闘う

宮里光雄（瀬名波 清）（一九三四～二〇一一）

### 1. 平一校同期の旧友

学業半ば十五歳でハンセン病を発病し、療養所で治療に専念しながら、成人後は自治会活動に参加して入所者の待遇改善や権利回復等のために尽力した宮里光雄こと、瀬名波清氏が病い（膝臓ガン）のため、本年九月十八日永眠した。七十六歳。平一校同期入学の旧友である。

一九七〇年ごろからの氏の、「らい予防法」で強制隔離された入所者の人権確立、差別の連鎖を断つ活動は周知のとおりである。「全療協」に拠って国の政策の誤りを裁判で認めさせ、「ハンセン病問題基本法」を制定させて、これから入（退）所者の安定した老後保障はじめ、地域社会と共生する宮古南静園の将来構想を具体化していく、この時期の逝去である。

本人はもとよりすべての関係者にとって痛恨の極みであろう。

### 2. 新聞人を完うした父

宮里氏は一九三四（昭和九）年十二月十八日、平良・下里二番地で、父進（旧名・起昌）、母やどのの七男二女の八番め、六男として生まれている。父進は十九歳で代用教員となり、日露戦争では現役召集を体験している。その後台湾に渡って教員や警察官になったが、大正半ば帰郷後は一時教職につい

たのち、草創期の宮古新聞界で活躍、生涯を新聞人として完うした著名人である。

宮里氏が学令に達したのは「十五年戦争」真只中、一九四一（昭和十六）年四月一日、尋常高等小学校に代わって国民学校が創立した時である。これよりさき四紙あった地元新聞社は、国の戦時言論統制で同年二月一紙に統合されている。

このため一九二二（大正十一）年十一月、父進が創刊し、以来社長兼主筆をつとめていた『宮古民友新聞』は廃刊させられている。四紙統合による新しい新聞は『宮古朝日新聞』。記録によればブランケット版、四頁建て、隔日刊である。父進は引きつづき社長兼主筆をつとめたようだ。新聞社は近年まで下里市場近く「レストラン銀座」のあった辺りで、道をへだてた向かいに印刷所があつて新聞等を印刷していた。

### 3. 魅力的な新聞印刷

平良第一国民学校初等科の同期入学とはいえ、始めから面識があつたわけではない。記憶は定かではないがおそらく二、三年生ごろからではなかつたらうか。住まいが同じイリ里というよしみからであつたらうか、いつか言葉をかわすようになっていた。下校時には少し寄り道して印刷所の前を通り、入口のガラス戸越しにこっそりのぞき見したりする。印刷機上に数センチほど積み上げた大判の白紙を熟練の職工が一枚

一枚大型のローラー状になった部分にはさみ込む。そうすると一面活字の文字で埋めつくされた新聞が向こう側に出てくる。何回見ても飽きないのである。おまけに刷りあがったばかりの紙面のインクのおいが外までただよってくる。何ともいえない魅力である。

#### 4. 新聞社主催の綱引き

時折りには向かいの住宅兼編集室らしき玄関に接した、藤椅子の並ぶ部屋にさそわれて、アメ玉であったか梅鉢であったかを振るまわれたりする。宮古で唯一の新聞社であり、よそでは味わえない体験であった。

ある年の夏も終わりに近く涼しくなったところであったろうか。市場通りと下里通りの交差する十字路を中心にして、東西に分かれて大綱引きが催された。西側のはずれはちやうど新聞社付近で、そこで引いた記憶である。平良の大綱引きは古くから宮古支庁前と聞いていたので、おそらくは新聞社の何かの記念事業ではなかったろうか。

一九四四（昭和十九）年夏、戦時色濃厚となって宮古でも軍用飛行場の建設が始まり、万余の軍隊が展開してきた。料亭の立ち並ぶイリ里には昼も夜もカーキ色の軍服を着た将兵の往来のみが目立つようになったところ、戦時疎開が始まった。宮里氏の一家は台湾へ、当方は九州である。

#### 5. 新聞一家

十余年ぶり帰郷し一年余療養ののち宮古毎日新聞社に勤めた。そこには平良好児編集局長のもと、次長として瀬名波栄氏がおられた。宮里氏の三兄である。二年勤めて日刊南沖繩社の創刊に参加した。

そのころ地元紙によく寄稿しておられた瀬名波昇氏と親しく言葉を交わすようになった。四兄である。また、時折り雑誌『文芸春秋』の随筆欄に確か東京都庁職員の肩書きで随筆を書いておられる瀬名波武氏は元は『読売新聞』の記者であり、次兄であることを誰からともなく聞かされたものである。

一般に、子は親の背中を見て育つというが、宮古の新聞界草創期に貢献した瀬名波進の男子三人はいずれもその道を歩んでおられる。とりわけ栄氏はその後、著述活動を兼ねて先の大戦中の宮古・八重山の状況を精力的に調査し、『太平洋戦争記録』先島群島作戦（『宮古篇』）など、多くの著書・論考を発表しておられる。だが、三兄・四兄お二人から弟清こと宮里氏について一度も話は出ていない。

#### 6. 五十余年振り「再会」

旧平良市役所を退職して二年めであったろうか。同年生の故平良市教育長砂川道雄から、宮高四期卒の「卒業四五周年

記念誌」を出すので協力してくれと声をかけられた。四期卒なら大方平一校同期入学生である。席上、当時もはやハンセン病に関心を持つものなら誰れ知らぬものもないであろう、宮古南静園入所者自治会長・宮里光雄が、旧友瀨名波清その人であることを知らされた。五十余年振りの事実上の「再会」である。

「らい予防法」のもと、強制隔離された入（退）所者の人権回復のために、壮絶な生涯を貫いた旧友瀨名波清とは、一度も往時を語ることなく逝かせてしまった無念を噛みしめる日々である。合掌。（「宮古郷土史研究会報」一八七号、二〇一一・一一・一二）

#### 労働運動

内間一光（一九二六～一九七二）

内間君と面識を持つようになったのはいつのころであったか、はつきりしない。一九五七年十月、『宮古毎日新聞』に入社、毎朝、徒歩で港近くの水上署、船会社等に始まって、各官公庁を訪問するのを日課にしていた。旅館街をへて、最初にあずねるところが、当時、宮古中央郵便局とよばれていた、いまの沖縄宮古郵便局である。窓口の職員に軽い会釈をかわしつつ、局長室に入る。何分かお茶をこちそうになりながら、

記事になりそうな話題はないか、対話するのである。毎朝のことなので、おそらくそこに勤務する内間君とは顔を合わせているはずだが、残念ながら記憶が定かでない。

一九六〇年代に入ってから、きわめて鮮明である。戦後史の上では一般に「六〇年安保」というけれども、このころの沖縄県は安保よりも沖縄県そのものが、戦後第二の祖国復帰運動、しかもきわめて急速に、全県的に高揚していく時期である。宮古に限ってみても、同年四月二十八日、沖縄県祖国復帰協議会宮古支部が結成された。教職員会や労働組合は勿論のこと、婦人会、青年会、それに初発時には市町村長会、同議長会等も参加していた。五月一日戦後初めての統一メーデー、八月九日の原水爆禁止・平和宮古郡民大会と、大衆運動が矢継ぎ早に動き出した。周知のようにこのころ宮古に大きな屋内集会場はなく、大方は北小校庭が会場で、夏は日差しが強く、冬は寒い。

教職員会を別にと、この種運動の中核をなす労働組合は、宮古地方庁を中心とする宮古官公労、郵便・電々の宮古全通（正式には沖縄全通信労働組合宮古支部）、平良市役所の市職労の三組合である。時として青年会や帰省学生会が主宰する催しであっても、教職員会とこの三労組の参加なくしては、量・質ともに様にならなかつたであろう。



沖縄県原水協の四人のオルグを迎えて、一九六一年の六月七、八の両日、宮古本島を一周する初の郡内平和行進の成功を背景に、八月六日開かれた「八・六原水禁・平和宮古郡民大会」で、正式に原水協宮古支部が結成された。初代支部長に満場一致、内間一光君が選ばれた。沖縄全通宮古支部長に選任されて三年め、このころは書記長、二十五歳である。

その後の十年、宮古における大衆運動のあらゆる場で顔を合わすことになる。祖国復帰運動、平和運動は当然のこと、大は労農共闘会議から、小は元旦早朝の「暁の大合唱」に至る、うたごえ運動、名画鑑賞の自主上映運動まで、内間君はかかわっている。

一九六九年九月、四年前の平良市議選で労農共闘会議推薦・無所属で当選していた砂川金吉兄が二期めは沖縄人民党公認で出馬することになった。しかし当時の人民党は沖縄本島でこそ瀬長亀次郎氏や古堅実吉氏らが、祖国復帰民主統一戦線を掲げて米軍に抗する英雄的活動で知られてはいても、宮古ではさほど知られていない。それどころか戦前の悪名高い治安維持法下の「特高警察」以来の、いわれのない「アカ攻撃」の方がまだ色濃く残っていた。人民党は大眾選対で市議選を取りくむことになったが、表立ってその役を引きうける人がいない。止むなく選対委員長を受けざるを得なくなつたとき、

裏方にあつて最も大事な事務局長は内間君が引きうけた。

党本部役員を迎えて、街頭宣伝はじめ、各種懇談会で政策の浸透をはかったが、善戦空しく宮古で初の人民党公認候補を落選させてしまった。宮古の選挙のウラのウラを知らない、素人ばかりのクレイ事のせいだと先輩方にキツク叱られたものだ。

しかしこれが縁というものであろう。以来あらゆる選挙で共に人民党候補とかかわるようになった。祖国復帰運動は米軍の全面占領下で、一九六八年十一月、初の「主席公選」をかちとり、屋良朝苗氏を当選させていた。一九七〇年十一月には戦後初の「国政参加」選挙も実現させた。衆院は定数五に、自民党の西銘順治、国場幸昌、社大党の安里積千代、社会党の上原康助、人民党の瀬長亀次郎氏らが当選した。

宮古の瀬長後援会は故伊志嶺朝茂氏を会長に、人民党本部からくるピラくぱりだけでも大変だった。宮古全域を対象に三十種近くもくる。市議選と違って多くの活動家が参加したが、それでも消化しきれない。一日三回も配布させて、担当者是不評をかったものだ。そんなとき内間君の宮古共通語は疲れた活動家たちを大いに沸かせてくれた。雨の多い季節で、ピラをかかえて出かけるとき、帰るとき「濡れた、濡れた」(アイジャ・アイジャ)、「ニワトリ、ツメタイ」(トゥ・ピグ

ル)といった調子である。

活動で心身ともに疲れはて深酒して寝過ぎたのであろう、「行方不明」になって大騒ぎさせたこともある。洋子さんの妹さんの手術の時は東京まで付き添い、滞在が長引くほどに宮古のことも気にして長文の手紙を何回も寄こしてくれた。硬軟合わせ持つ得難い同志であった。人生八十年とは言わぬまでも三五歳は余りにも早過ぎる。道子さんと耕一郎君が成人するまでは元気でいてほしかった。内間よ!

〈編集を終えて〉

若くして逝った内間一光君のために何かできないだろうか——と考えたのは、没二十年を迎えたころである。周囲の何人かに漏らしただけで、祖国復帰二十年の喧騒にまぎれてそれ以上進展させ得なかった。以来何かにつけて内間君を回想してきた。とりわけ父親を知らない道子さんが、小・中・高校をおして一度も同一校で学んだはずもない我が家の二女と交流があるのを知ったとき、その思いは一層深くくなった。

一九九六年十二月、歴教協の定例会が内間君と同期の仲地清成氏宅で開かれたとき、改めて提案、賛同を得た。内間君が全通役員として宮古地区のあらゆる民衆運動にかかわって

いたのは周知のとおりだが、一九六五年十二月、『洋学論』で知られた歴教協副委員長の高橋碩一先生を宮古にお迎えするのを契機に歴教協宮古支部が設立された、そのころから那覇へ転勤するまで歴教協の会員でもあった。それ故の提起である。明けて友利恵勇兄宅で開かれた一月定例会で具体化、下地國雄、友利定雄、仲地清成、仲宗根の四人が世話役となつて、発起人会を発足させることになった。仲地氏が同期有志へ、友利定雄兄が内間君をよく知る労働組合有志に声をかけ、二月五日、八人の発起人がそろつた。

そこで確認されたことは二つ。内間君の「偲ぶ集い」を催すこと、父親を知らない道子さん、耕一郎君に内間君の人間像を伝える手作りの「追悼集」を出すことである。そのさい、洋子夫人に負担をかけない、きわめて内輪の集いにも申し合わせた。そのため呼びかけ対象は、追悼文を書くこと、「偲ぶ集い」に参加することを負担としないであろう発起人八人の知る範囲に止どめた。内間君の勤務歴について郵政管理事務所への照会をあえて取り止めた所以でもある。

生あらば今年三月三十一日定年を迎えたであろう、内間君本人には及ばぬが無念の思いは皆同じである。二十五年も早く逝ってしまった内間君を偲びつつ、洋子夫人の筆舌に尽くし難い苦勞のなかで成長した道子さん、耕一郎君に、せめて

父親像の片鱗でも伝えられるならば、この手づくり「追悼集」発行の目的は果たせたといえよう。

洋子さん、道子さん、耕一郎君、この「追悼集」は夫君であり、お父上である故内間一光君の、今なお変わることはない身近な友人を自負する一同からの贈りものである。（「勤労大衆と共に」内間一光君を偲ぶ）一九九七・四・一〇）

#### 農民運動

下地 肇（一九三七～二〇一六）

50余年親交のあった下地肇君が3月29日思いがけず旅立った。ご遺族はじめ、彼を知る友人の多くが突然の訃報に驚いたことであろう。否何よりも彼自身無念の思いではなからうか、私より三つも若い（1937年4月30日生）し、いつか落ち着いたら宮古の農民運動史をまとめたいと話していたのだから…。78歳。

肇君に初めて会ったのは1962年初頭。この年、「琉球政府」は大型製糖工場に搬入するサトウキビの代金をトン当たり2ドル引き下げた。宮古は稀にみる豊作のせいか、当初は大勢としてはあまり感じなかったようだ。しかし土地を米軍に取られ、狭い耕地に甘んじている沖縄本島中部の人びとにとって収入減は敏感に反応した。たちまち引き下げられたキ

ビ代を返せの運動が巻き起こった。沖縄人民党が積極的に取り上げ、瀬長亀次郎、又吉一郎、親川仁助、仲松庸全氏らが全県的にオルグを展開した。

こうして「全沖縄キビ代値上げ農民協議会連合会」（全沖縄）が結成される。宮古も市町村ごとに支部ができ、「全沖縄宮古地区協議会」へと発展する。議長は平良忠勇（のち与那覇達雄）、書記長は砂川金吉ら。肇君は城辺支部の書記長をつとめた。宮古製糖と粘り強く団体交渉が開始され、最終的にトン当たり1ドル還元させた。沖縄製糖もこれにならない、農家に初めてボーナスが出たと沸き立ったものである。

この時期、私は慶世村恒任、稲村賢敷両碩学の著書・論考をあさる日々でもあった。そのせいか肇君にさそわれるままに毎週のように土曜の夜は城辺の学習会に通い、臆面もなく宮古史を語っていた。そのつど肇君の家に泊めてもらい、未明に起きて準備してくれた、フジ子さん心尽くしの朝食をいただき、一番バスで平良へ帰っていた。冬の夜明け前は真っ暗闇。毎回バス停までフジ子さんが送ってくれた。

1965年、「琉球政府」は大型製糖会社の合併を打ち出した。宮古・伊良部・宮多3社を合併、将来的には沖縄製糖も合併させ、宮古1社の方針であった。戦前、当時の沖縄1社で苦難の歴史を知る農村は直ちに反対運動に立ち上がった。

市町村長会、同議長会、同農協会長3者と提携し「4者協」としての運動であった。同年7月24日。3社合併のための宮糖株主総会当日、農民と武装警官隊が対立、平良のまちは「騒乱状態(?)」になった。

それから1カ月後、肇君をふくむ7人の農村活動家が次々と逮捕された。10年に及ぶ裁判闘争で、一審有罪、二審無罪を勝ちとった。肇君は40日に及ぶ拘留期間中、被告団長として「黙秘」を買いたと伝えられている。

1960年代は国際的連帯のもと、歴史に残る壮大な祖国復帰(沖縄返還)運動が展開されている。「農民弾圧事件」も祖国復帰運動の一環に位置づけられ、全県的な連帯のもとに取り組まれた。2015年12月、当時を知る有志によって『宮古農民弾圧事件50年・「騒乱非」無罪判決40年』の「記念誌」が出版された。

4月1日、宮古バプテスト教会で催された肇君の告別式の開式直前に、友人として挨拶をと請われ、遺族挨拶につづいて、ここに記した事柄のあらましを述べ弔辞とした。

下地肇君、県議選挙、参議院選挙を目前にしての旅立ちは心残りでしょうが、たたかいの足跡は立派に結晶しています。

「記念誌」は宮古に糖業ある限り、読み継がれることでしょう。安らかにお休みください。合掌。(「宮古毎日新聞」二〇

一六・五・一四)

漫画家・古典音楽

砂川しげひさ(惠永) (一九四一〜二〇一九)

著名な漫画家で、クラシック音楽にも造詣の深い砂川惠永(しげひさ)氏が三月六日、埼玉県病院で、うつ血性心不全のために亡くなられた。両親は宮古出身で、ご本人については「那覇生まれ」と記した資料も少なくないが、訃報を伝える県紙は、「宮古島生まれ」と明記している。

#### 1. 漫画雑誌の常連

一九四一(昭和十六)年十月十一日沖縄県で出生、四四年、三歳のとき戦禍を避けて家族で宮崎県に疎開し、戦後まもなく兵庫県尼崎市に引っ越し、そこで育っている。それゆえ一般に「那覇市生まれ、尼崎市育ち」と伝えられているようだ。中学・高校時代から絵の才能を現し、雑誌「漫画少年」や「野球少年」の常連投稿者となり、高校卒業後はデザイン会社や業界紙に勤める傍ら、大阪の夕刊紙に四コマ漫画を連載して、漫画家として一人立ち。二十二歳のとき「競争相手がいない。もつと文化的刺激が欲しい」と一九六四年上京する。当初はなかなか作品が売れず、二畳半の朝夕二食付き下宿代にも事欠くようだったが、「漫画サンデー」編集長の知己を得て、一

一九六九年同誌に「寄らば斬るド」の連載を開始、一九七一年には第十七回文藝春秋漫画賞を受賞、一躍名を挙げる。

一九九六～二〇〇三年まで「朝日新聞」夕刊に「Mrボオ（のちに「ワガハイ」に改題）」を連載している。二〇〇七年には第三六回日本漫画家協会大賞を受賞し、著書は三〇点をこしている。およそ次のとおり。

## 2. 著書

一九七二年「テンプラウエスタン」読売新聞社、「ホンダラ部落」青林堂、「寄らば斬るド 砂川しげひさ傑作集」

### 立風書房

一九八二年「スラブの星 ドボルザーク」音楽の友社

一九八四年「名演奏家たちの一方的音楽宣言」光文社（一九

### 八六年・朝日文庫）

一九八六年「クラシックだドン！」共同通信社（一九九三年

「がんばれクラシック」改題朝日文庫）、「コテン

音楽帖」（一九九一年「コテン氏の音楽帖」改題

### 講談社文庫）

一九八七年「コテン氏のおもしろ組曲」朝日新聞社

一九八八年「ぼくの漫画人生はカプリッチョ」新潮社

一九八九年「コテン氏のおもしろオペラ」朝日新聞社、「なん

たってモーツァルト」東京書籍、「コテン氏のカプ

リツチョ気分」朝日新聞社

一九九〇年「コテン氏のラストコンサート」朝日新聞社、「ぶ

つぶつの時代」（早川書房 砂川恵永名義）

一九九一年「つべこべいわずにベートーヴェン」東京書籍

一九九二年「鼻ちようちんのメヌエット」世界文化社

一九九三年「のぼりつめたら大バツハ」東京書籍

一九九四年「聴け聴けクラシック ぼくの名曲101選」朝日文

### 庫

二〇〇〇年「コテンコテン流クラシック超入門」東京書籍

二〇〇二年「ワガハイとチビ丸」朝日新聞社

二〇〇三年「チャンとチビ丸 WEB版」星の環会

二〇〇四年「ボスとチビ丸 WEB版」星の環会

二〇〇六年「だいな絵本」星の環会

二〇〇七年「タマちゃんとチビ丸」「チビ丸の時代」「ノラの

時代」「ワガハイの時代」以上、星の環会

二〇一〇年「ぼくのあかん信心帖」金光教徒社

## 3. クラシック音楽通

一九八五年十二月から八六年九月までの十回、岩波書店の月刊誌「図書」にエッセイも書いている。漫画家になる前の生い立ちから日常の暮らしまで、自分史のような内容が展開されている。

「実は小説家になりたかった」「せんべいの焼き方教えます」「我輩はメモ魔である」「丸腰ものがたり」「本を聴く」、漫画わがはい史」は五回連載している。

「文藝春秋漫画賞」を受賞して、「順調に行くかにもえた」が、「過労がたたって倒れ、心臓を手術した」のを契機に、「学生のところから好きなクラシック音楽を聞きまく」り、「それが契機に書き始めた音楽関係のエッセイ、『週刊朝日』連載の『コテン音楽帖』は反響を呼んだ。今は、NHK・FM音楽番組のレギュラーから、カルチャー教室の講師までこなすプロ顔負けの古典音楽通。にっこり笑って斬る評論は、『寄らば…』の冴え」と評されるほど(『沖縄タイムス』一九九〇・四・一七)。

#### 4. 「晩年はふる里で…」

父親は、「終戦直後はサトウキビをリヤカーに載せて売り歩いてた」という。七人兄弟の氏は三番め。「子供は関西育ちだから、完全な大阪弁だ。両親はなかなか沖縄弁が抜けなくて、夫婦の会話はほとんど沖縄弁だった」(『コーラルウェイ』一九八九年)。いつであろうか、「父母の故郷、三歳までいた宮古島を訪ねた。『感動的だった。晩年はふる里の海の近くで暮らしたいって、気があるんですよ』と言っていたのに、果たせず逝ってしまった(前掲紙)。

〈付記〉「著書」は宮川耕次氏の提供です。(宮古郷土史研究会報)一三三二号、二〇一九・五・一三)

おわりに

こうして一つにまとめて通読すると、如何に多くのよき先輩・知友にめぐまれて、大過なく今日を迎えているかを今さらのように痛感させられている。己れはひとりではない、つねに多くの先輩・知友に支えられている、ということである。なかには宮古はもとより広く県内外に知られている先輩・知友もおられる。この小さな宮古が時として大陸の感を抱かせたりすることがある。最高峰一一三メートル、全体百メートル以下の平坦な島々の、みはるかす地平線の自然景観もさることながら、むしろ各面に活躍する多彩な人物群像からくる印象であろうか。まさに宮古は「大陸」なのだ。感謝するばかりである。

本稿には収録できなかったが、関心のある方は次の関連する拙論も手にとって下されば幸いである。

宮原 昌茂

「宮原昌茂画伯のプロフィール」一九九一・三・二五『平成二年度平良市の文化財』、「宮原昌茂画伯の百歳の長寿を祝

う」一九九九・二・一二『宮古郷土史研究会報』一一一―号、  
「宮原昌茂画伯と文化財復元」二〇〇二・二・一―三・三『平  
良市総合博物館 宮原昌茂展』

与那覇寛長

「沖繩人ばなし 与那覇寛長」二〇一・六・七『琉球新  
報』

前泊 徳正

「池間島の〈民間社会学者〉前泊徳正生誕百年」二〇一〇・  
四・三〇『宮古郷土史研究会報』一七八号

平良 好児

「燃えつつ逝った好児さん」一九九七・五・二〇『平良好  
児追悼号』郷土文学の父に『、宮古文学界の『種まく人』  
平良好児の世界』二〇〇〇・一・二〇『宮古研究』八号、  
「平良好児生誕百年第十五回『平良好児賞』に寄せて」二〇  
一・四・一四『宮古毎日新聞』、「平良好児と戦後宮古の文  
芸概況」二〇一三・五・二〇『麻姑山 平良好児句集』、「平  
良好児と『郷土文学』」二〇一四・三・二七『琉球・島の宝』  
創刊号、「平良好児、若き日の作品(批評・詩)群」二〇一四・

五・三一『宮古島文学』一〇号、「新聞『南沖繩』の周縁」二  
〇一八・五・一四『宮古郷土史研究会報』二二六号

羽地 栄

「イリ里の生き字引き 羽地栄先輩を讃える」二〇〇〇  
『イリ里の民俗』

平良 新亮

「故平良新亮さんの宮古研究の足跡」二〇〇六・四・五『宮  
古毎日新聞』(のち平良博彦編『平良新亮の足跡 亡羊の記』  
に再録、二〇〇七)

宮国 泰良

『週刊宮古』のこと」二〇一九・七・一九『宮古郷土史研究  
会報』二二三号